



夜の影―優しい怪談
渡辺えり子

登場人物

天宮伸彦

霜月千草

霜月泡夫

霜月竜之介（クロルプロマジン・大男2）

霜月歌子（マニーの妻・悪魔大王）

駄才オサム（画家マニー・中国人の薬売り）

神前照夫（白兔イミプラミン・大男1）

神前弥生（泡生）

神前マリ子（マニーの娘2・大男の飯炊き女2）

金田明（黒兔ヒドラジン）

金田緋鶴（マニーの娘1・飯炊き女1）

金田貢（マニーの娘3・飯炊き女3）

大仏五郎兵衛（マニーの執事）

夢は何かを語ろうとして夜の廊下をいざってやってくる。そのまわりつく暗い手の感触はぼんやりと悲しいが、盲目的な母の愛にも似て、振り切る事が惜しまれる。

天井により近い空間に一筋の光が差し込み、それは太陽を孕んだ稲の穂のようにゆっくりと弾ける。その眩い光によって焼き付けられたように静止する黄色い人々の姿がおぼろげに浮き上がる。それは一八五五年の万国博覧会に拒否されたというクールベの『画家のアトリエ』に似ている。

己の生きる様を見つめるような具合に人々は、てんで勝手な方向を向き、その姿は妙に物悲しい。中央の、一枚の絵を描き上げようとして筆をふるう画家は、豊かなアツシリア風のヒゲをたくわえている。しかしその描かれた絵は、青空でも森でもなく、神経質そうに唇を尖がらせる女子高校生の似顔絵である。しばらくすると、光はその画の中の少女をとらえ、人々はぼんやりと消えて行く。――

と、どこか下の空間に、幽霊のようにおもむろに生きた少女が現れる。似顔絵のしたたかさに比べ、生きた少女は陽炎のようで、驚くばかりの平凡さを装っている。セーラー服姿のその目立たない少女は椅子に座り結び目がかつきり二十ある長い紐を持ち、その結び目をひとつひとつたぐりながら、何か唱えている。

少女

デイバイデイ、インエブリウエイ、アムゲッティングベターアアンドベター、デイバイデイ、インエブリウエイ、アムゲティングベターアアンドベター……

いつの間にか、地の底か空の彼方から聴こえるバイオリンの音。

少女それに合わせるかのように歌うように唱え出している。

少女

こうやって座っていると、何かが、体の底の方からやってくるのが判るのです。まるで怒濤のように押し寄せ、ある時は静かに逆流し、それらは黒い渦みたいに私の中を駆けめぐり、しびれに似た興奮を覚えさせます。

精霊のように踊り狂うそれら混沌とした者達は、まるで甘美な死の世界へと、私を誘惑しているようでもあります。それらの中でちよつと遊んだあと、ようやくそのパイプラインをくぐり抜け、私は私であることをとりもどす。なんて寂しい、寂しい興奮でしょう。

……、デイバイデイ、インエブリウエイ アムゲティングベターアアンドベター……

酔っぱらいの立ち小便の音と、向かいのアパートの麻雀牌の音が消えると、牛乳屋が来て新聞屋が来て、早起き会の老人が犬を二匹連れてパン屋の店員に挨拶して角を曲がる。しばらくは。パタパタと過ぎていく時間の音。隣のアパートの老夫婦が起き出すと、私は寝返りを打って耳を澄ませる。「バカだねバカだね、あんたほどバカな人はこの世にはいない。」かすれた老女の声で老夫婦の日課が始まる。「あんたがバカだから学会から追放されたのよ、え？バカだね、ああバカだバカだ。」老人の声は「ウー」としか聞こえない。

そのうちにバシリという音。又ぶたれた。老人のかさついた手のひらと頬は、バシリと、質の悪い紙をこすり合わせた音に似ている。「ウー」老人はしばし放心状態で、倒れた老女の丸い背中を自分の生まれつきのコブを見るように見ているのかもしれない。老女は倒れてもヒネられても「バカだバカだ」を連発する。老人は、日の差さない、薄暗い廊下に面した部屋のドアを開けたり閉めたり把手をつかんでガタガタいわせたりしながら、呼吸を整え、老女の刈り上げた茶色いうなじをつかみ、親指大くらいの髪の毛の束を引っこ抜く。

「グエー！」という老女の悲鳴は、一町ばかり響き渡り、せつかく開けた雨戸をまたバタバタと閉める近所のしかめ面の主婦達のため息が、老女の泣き声に混じる。

定刻、老人にクルミを三個ばかりにぎらせると、老女は缶詰工場に出かけて行く。クルミをガキガキ鳴らしながら、老人はポーツと後ろを振り返る。万年床の上にペシャンと座って一部始終を見ていた寡黙な自分らの息子の事を思い出すのだ。頭の禿げたこの息子の尻の下の汚れたビニールをはがし、窓に干す。階下の屋根に尿の雫がポタポタと落ちる。もう少したつと、アゴのないカエルのような顔をしたこの息子は歌を歌い出す。最初から最後まで同じトーンで、上がるべき所は変に声を張り上げるといった調子で「待てど暮らせど来ぬ人はー」と歌い出す。鼻を詰まらせ、よだれをたらし、「バテドグラセドゴンヒトハ」と宇宙人のような声で繰り返す歌う。起きたばかりでもう宵を待っているのだ。自分自身が宵待草のように、ヘナヘナと朝の光の中で、ヘナヘナと宵を待つ。

近所の主婦が一齐に雨戸を開ける。米屋の二階からは三味線の音が、乾物屋の母屋からは、強迫観念じみて、半永久的に止まらない天理教の経文を歌う声がそれぞれかすかに聞こえてくる。弟が顔を洗っている。低血圧の母が地球最後の日を予言した占い師のような顔をして食事を作っている。父はしょんぼりと新聞を開いている。そのうちに誰に言うでもなく「行ってきまあす。」と調子をそろえ、三人一緒に忽然と消える。消し忘れたラジオの天気予報が晴れるでしょうとピ

リオドを打つ。

……朝には朝の光が、夜には夜の闇が、その大きなものの中に繰り返し聞こえる小さな音がある。私自身を向こう側から見られるとしたら、私はどんな音をしているのかしら。こうして少女らしくつつましやかに物思いに耽っていると夜が来る、夜が来る……。

今度は調子を変え、色を付けて唱え出す。

少女

アイツムゴーイングトウスリープ！

スリープ、スリープ！スリープ！

——と、一枚の古い写真がそうであるように、何かしら胸をくすぐる懐かしい音楽とともに、別なひとつの空間が、ゆっくりと、遠くから、今、この場所へとやってくる。

定かになると、それは昭和三十年代の法事の風景である。神前靴店の居間で、静かに菓子を食べる、神前照夫、弥生夫婦その娘マリ子、照夫の姉霜月歌子とその息子泡夫、歌子の愛人駄才オサム、照夫の妹金田緋鶴、夫の金田明、その息子、貢の姿が浮かび上がる。

その後ろ側には、障子の向こうで、靴をたく老職人大仏五郎兵衛の影がボンヤリと見えてい

照夫

どうも……、この、もひとつ、はずみませんなあ……。

駄才

～はあ。

金田

普通ですと、この辺で歌のひとつも、この、ねえ。

照夫

駄才

金田 ー……………。

緋鶴 しょうがないわよ、兄さん、シラフで歌ったり踊ったりできる人、なかなかいないもの。
照夫 つまらんねえ、去年までは、うちも盛り上がったもんだが、やはり霜月さんがいないと……。

全員、駄才を見る。

弥生 あんた……。

照夫 いや、駄才さん。駄才さんは本当はいけるんじゃないですか？

歌子 ダメです！

照夫 なんだ姉さん、ちよつとくらい良いんじゃないの？

歌子 あたしが霜月と別れたのはお酒の事もあるんですよ。酒飲みと丸顔の男だけはどうしても許せません。

マリ子 おばちゃん、男の人が丸顔だとどうしていけないの？

歌子 過去において、政治家以外に、丸顔で優れた業績を残した人が誰かおられますか？頭の良い人に丸顔はいません。男というものはね、マリちゃん、悩むものなの。常にとつもない事にとつもなく悩み、たまに女の私達が冗談を言ったりして遊んでやらないと、深い淵の中にはまり込んで行き詰ってしまうものなのよ。

マリ子 あたしだって悩むわよ。

歌子 生きるか死ぬか？

マリ子 たまにね。

歌子 ダメよマリちゃん。女は男で悩まなくちゃ。悩み多き男の側で、揚げ足取ったり、こづいたりして男の人がうまく悩めるような状況をこしらえて行くのが私達女の役目なんだから。だからその対象となり得る男の人、この「悩ませて救う」ことの価値ある人物を求めて悩まなくちゃ。

マリ子 だったら別に丸顔でもいいじゃない。

歌子 丸顔の男には悩みがないのです。ポチャポチャ太つてくらげみたいな男なんてもう人ではありません。あれはもう、相撲取りです。

マリ子 おすもうさんて人間じゃないの？

歌子 悩みなき人は人ではありません。いいですか？人は勝つか負けるかなんて単純な事に悩んではいけないんです。

照夫 姉さん……

歌子 だから私は戦争とスポーツが大嫌いなんです。あと何十年かして平和な世の中がもしやって来たとしたら、その時、競い合うためだけのスポーツは絶滅しているはず。人と人が肉体をぶつけ合つて血や汗にまみれて苦しんでいるのをですよ、何もせずに、それを見て笑ったり手をたたいたりして喜ぶなんて残酷な事が人のする事ですか？そんな事、社会が許してもこの私が許しません！反対、絶対反対です。

言いかけると、弥生、台所よりもどつてくる。一同しらけきつて、気まずい沈黙が続く。

弥生 あの……。ジュースお持ちしましょうか？

うっかり空のコップを持ちあげた全員、手を引つ込める。

緋鶴 あらいいのよ弥生さん、あたし達の事はもう放つといて、それより一杯いかが？

と、徳利を差し出す。

弥生 ……でも……

緋鶴 そうよねえ、ひとりで飲んでもつままないわよね。



1986年の再演より、左から、狩野さゆり、渡辺えり子、立花弘行、遠藤靖。

照夫 金田さんは、どうです？
金田 いやダメですよ、ちよつと口をつけただけでも、三日は動けなくなりますから。

全員、ため息。

照夫 死んだ親父がね、これが婿だったんですが、じいちゃんも戦死した兄貴も皆、下戸でしょ？この家はつまらん家だ。酒の相手が誰もおらなくて、これ死ぬまで嘆いてましたよ。ハッハッハッ。

と全員を見るが反応がなく、沈み切る。

照夫 (手持ちぶさたに煙草を吸い) 駄才さん、あなた、煙草は召し上がらない？

駄才 はあ……

照夫 家は煙草は皆やるんですよ、このくらい楽しみがなくちゃねえ。

緋鶴 (スパスパやりながら) でも、煙草は百害あって一利なしでしょう？そいくとお酒はほどほどに飲めば体に良いらしいものねえ。

照夫 全く、家の家系は損ばかりしちまって(弥生に)お前、ちよつと窓を開けて、空気の入れ替えだ。
マリ子 やだ父さん、寒い。

照夫 ダメだダメだ、煙草の煙は有害なんだ、特に子供は骨が溶けるぞ。この前専売公社の友人に聞いたんだから間違いない。

舞台上に溢れていた、煙草の煙が、一斉に窓の中に消える。

照夫 駄才さん、あなた、御趣味は？
駄才 ……、つり……、ですか……。
照夫 地味な方だなあ。
歌子 派手好きにはこりごりですよ。

と歌子トイレに立つ、と待ってましたとばかりに照夫。

照夫 あなたなんでまた、あんな十以上も年の離れた婆さんと一緒になる気になったんです？
弥生 あんた。

照夫 いいじゃないか、もう親戚なんだから。ねえ、駄才さん。ええ？なんで？

駄才 酔ってたもんですから。

全員 はあ？

駄才 いえ、あの、その……もう酒はやめましたから。

金田 おいくつでした？

駄才 ちょうど三〇ですか……。

緋鶴 お若いわねえ。

照夫 ねえ、ちよつと、どうです？姉さんの居ないうちにホラ、一杯だけ、ね？

駄才 でも……。

照夫 一杯ぐらい判りませんって、いつもあんなのに監視されてちやあ身が持ちませんでしょ。ね、ホラ、せつかくこんなにあるんだから。

金田 でもまたなんでこんなに？誰も飲めないのに。

照夫 酒が出てなきや、法事って感じがせんでしょ？せつかく年に一度の事なのにねえ。

弥生 この人見栄つぱりだから。

照夫 ささ、ぐぐつと……。

駄才 じゃ、一杯だけ……(と飲む)。

金田 でも義兄さんは、飲まなくても、いつも陽気ですなあ。

照夫 練習したんです。飲まなくても一見酔ったように喋る、これができないと近所の集まりでも同窓会でもほんと、しらけちゃって、私なんかわざわざ麦茶持つてくんですから。

金田 麦茶を？

照夫 色が似ているでしょ？ウイスキーと。専用の瓶に入れて、チビリチビリとね、一気に飲むとバレちゃうから。

金田 しかし、ビールの時なんかは、泡が立たないでしょう？

照夫 ハハハ、タンサンも用意して行きますよ。

金田 麦茶にタンサンをねえ。

照夫 これが結構いけましてね、お砂糖でシロップを作っておいて、混ぜて飲むと、そう、まるでヨウカンみたいな味がしておいしいですよ。

金田 へえ……(とツバを飲みこむ)。

照夫 おい、栗金団おかわり。

緋鶴 (立ち働く弥生を見て)すみませんねえ、落ち着いちゃって。

弥生 いえ、何もありませんが、ゆっくりしてって下さいね。

緋鶴 (トイレよりもどった歌子に)ねえ、姉さん、ちいちゃん、どうして連れて来なかったの？

歌子 なんか具合が悪いって言うから。

緋鶴 具合が悪いのにひとりだけ置いてきたの？

泡夫 チ、チ、チガウヨ、おばちゃん。

緋鶴 ええ？なあに泡夫ちゃん。

泡夫 あのこと……、お姉ちゃん、留守番の方がいいんだって、ひとりでいたいんだって、（と聞きとれな

いほどの小声で言う）

歌子 はつきり言いなさい。

泡夫 ……。

弥生 泡夫ちゃん、なあに？

泡夫、弥生の耳元でささやく。

弥生 ちいちゃん、ひとりでいたいから、留守番の方がいいって言ったんですって。

歌子 全く、この子は人見知りか激しくて。弥生さんが気に入ったんなら、この家の子になりなさい！
照夫 そうするか泡夫君、おじさん、男の子が欲しかったんだよねえ。

と泡夫に迫ると泡夫真赤に緊張して逃げまどう。

照夫 こら嫌われたかな。

笑っていた一同、泡夫のあまりの真剣さに、気まぜくなる。

弥生 でも千草ちゃん、心配ねえ、ひとりで。

金田 ははあ……。

緋鶴 何よ。

金田 そらお前、思春期だよ。

緋鶴 ええ？

金田 ホラ、ホルモンの分泌のアンバランスだよ。

緋鶴 だってマリちゃんだってちいちゃんと同じ年なのに、ちやあんとしてるわよ、ねえ。
弥生 この子はなりばかりでかくて。

貢 ちいちゃん、マリちゃんと比べられるのが嫌なんじゃないの？

緋鶴 だってちいちゃんの方が成績だって良いんでしょ？

貢 女の子は成績だけ良くてもねえ。

金田 貢！

貢 だってみんなそう言うじゃないか。

歌子 マリちゃんは弥生さんに似て美人だから。

弥生 マリ子はおとなしいだけで、何もできないんですよ。ちいちゃんはお義姉さんに似て、頭も良いし、しつかりしてるから。

歌子 あたしなんかより、弥生さんの方がしつかりしてるわよ。

緋鶴 そうよねえ、神前靴店をここまで大きくしたのは弥生義姉さんのおかげですものねえ。

弥生 あたしなんか、何も……。

金田 いや、義兄さんがうらやましいですなあ、ねえ。

と、金田、駄才を見る。駄才、弥生のお尻を、スツとさわる！

弥生 キヤツ！

全員、駄才を見る。

駄才 いや、丸いなあ、と思ったもんだから。

歌子 お尻は丸いに決まってるでしょ！

駄才 だから確かめよう……。



1986年の再演より、右から中進、渡辺えり子、立花弘行、豊川悦史、遠藤靖、狩野さゆり。

歌子 あやまりなさいよ。

駄才 すみません、深い意味はないですから。形をなぞっただけですから。

全員 ……。

照夫 まあまあ、いいじゃないか。やっこの、ハズミが出たと思えば、ねえ。

弥生 ……、ええ……。

照夫 去年までは、こんなもんじゃなかったんだから。

金田 ほんと、霜月さんがいないと静かですなあ。

緋鶴、金田をつつく。

弥生 金田さん、今度はサイダーになさいます？

金田 あ、お願いします。

金田、ここまででありとあらゆるジュース類を飲んでいる。霜月、登場。

霜月 よお！

一同 霜月さん。

霜月 いやいや、そのまま、そのまま、いいから、いいから、いやあ、遅れちまって。どうも、あいすみません。いやね、ホラ、今日、私の誕生日でしょ？教え子が十人ほど集まって、お誕生会を開いてくれましたね、ああいうの今、流行ってんですなあ。これでも途中抜け出すのに苦労したんだから。恨まないで下さいよ。や、照夫君、またこんなもんばつか食って、今に糖尿になりますよ。おつ、泡夫！お前治ったか？自閉症、ええ？ホレ飲め、やれ飲め、こっち来て飲め飲め。え？男の子は酒ぐらい飲めんと出世が遅れるぞ。

霜月、金田と貢に、無理矢理「ハッピーバースデー」を歌わせたりする。

歌子 あんた何で来たの？

霜月 なんてって何だよ。来ちゃいけないのか。

歌子 当り前でしょ、これは親戚の集まりなんだから、赤の他人が来る所じやないのよ。

霜月 俺はちゃんとマリちゃんと電話もらったから来たんだぞ、な、マリちゃん。

弥生 マリコあんた……

マリ子 だつてうっかり電話しちゃったんだもん。毎年かけてるから。かけちゃってから間違いました
なんて言えなかつたんだもの。

霜月 (弥生に) なんだマリちゃん、つれないねえ。

弥生 あたしは弥生です。

霜月 どうりで張りがないと思った。

歌子 あんた、帰りなさいよ。

霜月 何い！ようし、そんな事言うなら、絶対ハンコ押してやらないもんね。今日せっかく印鑑とホラ
(書類をヒラヒラさせて)、これ持ってきたけど、押してあげないんだもんね。

歌子 あんた！

霜月 だから俺まだシーンセツキ！だもんねえ。ゝ花の山形、もみじいの……なんだっけ？おい、次は
なんだ？ええ？

照夫 テンドウですよ。

霜月 テント？そうなんだよ。夏休みにね、蔵王にキャンプに行ってきたんだよ、生徒たちと。あの辺
はいいよお、ヤマって感じで、キャンプファイヤーって知ってる？知らんだろうねえ。薄幸な小

市民達には、あの山男達の生命の息吹とでも言ったようなあの炎の、あの炎のだね。……(泣く)
「シャロムチャベリン、シャロムチャベリン、シャローム、シャローム、レッヒトラオ、レー
ヒットラーオ、シャローム、シャローム。」

金田 何です？ソレ。

霜月 ホラネ、ホオラネ、だから嫌いなんだよ、仕立屋小僧は。

金田 仕立屋小僧って何ですか！

霜月 あらあんた仕立屋じゃなかった？

金田 そ、そうですけど。

霜月 しつかりしなさい。酔ってんじやないの？しかし仕立屋ってのはズルーインだよ。人の体を
ただで撫で回してお金貰ってズルーインだよ。

金田 寸法を測らなくちゃ洋服は作れないですよ。

照夫 金田さん、酔っぱらいの話、まともに聞いちやダメですよ。

霜月 何を！この悪玉が！貧乏な靴屋の主というのは悪者に決まってるんだぞ。靴屋は人様の一番下の
部分を扱う一番卑しい商売だから、だから卑屈で嫉妬深いと相場が決まってる。私のような崇
高で高邁な教育者と対等に話せる事をお天道様に感謝しなよ、ええ？

照夫 このお……。

霜月 無礼者、ひかえひかえ。

歌子 あんた！

霜月 ホラ、皆一緒に「社明音頭で明るく、ねっ！

貢 おじさん、なんです？その歌。

霜月 よっ、青少年、君もいたのか、影が薄いねえ、死んじやうんじやないの？

緋鶴 なんて事言うんです。ここまで苦勞して育てて、死なせてたまりますか。

霜月 人間皆いつかは死ぬものです。ささ、社明音頭で明るく明るく、皆さん御一緒に！ホラホラ。
照夫 知りませんよ、そんな歌。

霜月 君、本当に日本人？これは社明音頭と言って、検察庁が社会を明るくする運動の一環としておとし作った歌なんですよ。だから嫌いなんだよ、小学校もろくに出ておらん無知蒙昧な民は。さ、マリちゃん、おじさんと踊ろう。

マリ子 H！

照夫 しかし金田さん、なんでこのHッと言うんですかな？

金田 はあ、何故でしょうねえ。

駄才 Hって水素の事でしょう。水素というのは燃えると水を生ずる元素だそうですから、つまり女性の体がそうなった状態を予想して行う行為の事を「Hッ！」と、この……

照夫 ー燃えると水を生ずる！H！なるほど。

金田 バカだね皆さん、いいですか？Hッ！の事日本語で何と言います？

霜月 助兵衛！ですか……

霜月 助兵衛の助は何と書きます？

金田 助けるですね。

霜月 助けるを英語で言うと。

駄才 ヘルプ。

霜月 ヘルプの頭文字は？

三人 Hッ！なるほど。

霜月 こんな百年前から知ってますよ、あたしや。

駄才 アレ？

霜月 アレ？

駄才 先生！霜月先生でしょ？

霜月 ああ？

駄才 僕ですよ、僕、あの、駄才です。

霜月 ああ？

駄才 ホラ、桜田小学校で三年間習った。級長の駄才です。

霜月 ああ！君！オサムちゃん、米屋のオサムちゃんかい？

駄才 先生！

霜月 君だったの。

駄才 二十年振りです。

霜月 なつかしいなあ。元気？

駄才 はいっ！先生も。

霜月 うん、うんうん、で、君、ひとり？

駄才 いえ、今年の春に結婚しました。まだ籍は入ってないんですけど。

霜月 へえ、そりやおめでどう。

駄才 妻です。

と、歌子を紹介する。

霜月 こらどうも初めまして、いや駄才君は子供の頃から優秀な生徒でしてね。神童、神童ともう大騒

ぎで、奥さんもお幸せでしょう。

歌子 あんた。

霜月 あれ？まあいいや、とにかく飲みましよう。君、いけるの？

駄才 ええ、名古屋にいた頃はうわばみのドンと呼ばれたもんです。

霜月 ヒヤアー、こら良かった、しかし君、子供の頃は無口で物静かで、へえ、酒など飲むようになるとはねえ。

駄才 静かなるドン、なんてね。



1986年の再演より、霜月家、神前家、金田家の人々。
右から、中進、渡辺えり子、立花弘行、豊川悦司、遠藤靖、
狩野さゆり、白石禎、竹内久美、村上靖尚、

二人、高笑いして注ぎ合う。

駄才 先生、今日はゆっくりしてつて下さいよ。積もる話もありますし、おい、切れてるよ！おい爛だ、

爛、近頃の女中は気が利かなくて、これで、五反田一の料亭っていうんですから。

霜月 つまみも足らんしねえ、これじゃ金払う気もしませんなあ。

駄才 芸者は一応若いの揃えたって主が言っていましたから。

霜月 よし、呼べ呼べ、足りない分はボーナス払いだ。

二人の騒ぎに、あきらめて料理を食べたり、テレビを見たりしていた一同静止すると、いつの間にか障子の向こうにいた泡夫、五郎兵衛に話しかける。障子ゆっくりと開く。

泡夫 五郎兵衛さん

五郎兵衛 ……。

泡夫 五郎兵衛さん、それは何ですか？

五郎兵衛 これ？(ゆっくりと泡夫を感じて)さあね。

一同動き出す。

泡夫 さあねってそれ、五郎兵衛さんのじゃないの？

一同静止する。

五郎兵衛 持つてるだけさ。僕のじゃない。

泡夫 誰のなんですか？

五郎兵衛 さあ、いつだったか、誰かにちよつとね預かった。これは僕が生まれる前から持つていて、一番古くから持つてゐる物のくせに、他のと違ふんだ。このヒゲより、この指よりもつと馴染んでゐるくせに絶対に僕の物ではない、よその物さ。

泡夫 その人困つてないかしら、なくしちやつたと思つてないかしら。

五郎兵衛 そいつだつて忘れちやつてるかもしれないさ。それにそれもただこれを預かつてただけだったのかも知れない。長い間抱えてきた異物を持てあまして、僕にこれをたくした途端、こゝと切れたつて事も考えられる。

泡夫 へえ……。

五郎兵衛 あげるよ君に。

一同動き出す。

泡夫 えっ？

五郎兵衛 どうか僕もそんな目をしてこの小箱を見つめた事があつたつて。

泡夫 でもいいの？

一同静止する。

五郎兵衛 君がこれを見つけたのだからね。

泡夫 僕が？

五郎兵衛 そうさ、僕にはもうこの小箱を見つけれない。もう欲しくはなくなつたんだ。

泡夫 何が入つてゐるんだろ？

五郎兵衛 秘密さ。

泡夫 えっ？

五郎兵衛 そこには何か、秘密そのものが入っている気がする。

泡夫 (そつと中を見て) あっ、何も入ってないや。

五郎兵衛 よく見てごらん。

泡夫 ……でも……。

五郎兵衛 朝に開ければ朝の光が、夜に開ければ夜の闇が入っている。いいかい、よおく見るんだ。

泡夫 ……。

五郎兵衛 秘密とは抽象だ。抽象とは君だけの秘密さ。そこには心があるばかり。

泡夫 心で見えるんですか？

一同動き出す。

五郎兵衛

ハハハ、もうこれ以上、僕に青年の会話をさせないでおくれ。随分久しぶりでキザな事言っ
たんで、腰の神経痛が三拍子でやってきた。

一同静止する。

五郎兵衛

ズンチャツチャツ、ズンチャツチャツと神経痛が骨の回りで三角形に折れ曲がる。もう僕は
何も話さないよ。

泡夫 押しましようか？

五郎兵衛

いやいや、今の僕の持ち物はほんのちよっぴりなんだ。そう簡単に楽にはなりたくない。痛
みが消えると、僕のものがひとつ消える。

と、靴をたたき始める。一同動き出している。



1986年の再演より、親戚一同。

泡夫 五郎兵衛さん、五郎兵衛さん。

マリ子 ダメよ泡夫ちゃん、何言っても判らないんだから。

泡夫 ……。

マリ子 何それ？

泡夫、隠そうとするのを、奪って開けようとする。

泡夫 僕のだ、それ僕のだ。

歌子 泡夫、何してんの。

泡夫 五、五郎兵衛さんに、も、もらった。

照夫 なんだ、六神丸の薬箱じゃないか。

金田 六神丸？

照夫 下痢、腹痛、胸やけと、何にでも効く、ホラ、子供の頃に良く飲んだじゃないか。

金田 ああ、あの黒い粒々の。

照夫 山奥に住む大男に中国人の薬売りが妖術をかけてだね、丸い薬の粒にしたのが始まりだって。

金田 大男？

照夫 ホラ、人間てのは、二十ぐらいで成長がとまるもんだろ？それが、どんどん死ぬまで成長していくと大男になるんだな。その超人的要素をすべて取り入れたのが六神丸という噂だ。

金田 じゃ、この中には大男がぎっしりと詰まってる訳ですか？

照夫 そういふ事になりますか？

金田 大男つてのはどこにいるんです？

照夫 うん、この頃、六神丸の名を聞かぬところから見ても、もう絶滅しちやったんじゃありませんかね。

金田 ひと頃、一遍に取り過ぎたんでしょうなあ。

一同 あっ！

とテレビの方を見る。恐怖のミイラ男のテーマ曲が流れ、泡夫を除いた全員、楽し気な悲鳴をあげる。

顔を引きつらせ、失神寸前の泡夫。おもむろに立ち上り、追いつめられた夢の中のようにもがき、走る。

座っていた少女、今度は洋画の中の気丈な女がよくやるように、両こぶしに力を入れ唱え出す。

少女 アイツムツゴーインツグトウ スリープ！ スリープ！ スリープ！ スリープ！

親戚一同暗闇の中に吸い込まれ、走る泡夫の姿ばかりが白々と見える。
いつの間にかひとりの男が入って来ていた。

男 千草さん！

少女 ……。

男 落ち着いて下さい、千草さん。

少女 ……あなた、誰？

男 僕です、僕ですよ、千草さん。

少女 あら……天宮さん、どうしたの？

天宮 さつきからノックしてただけ……。

千草 そう……。

天宮 新興宗教かなんか？それ。

千草 えっ？

天宮 朝晩欠かさず唱えただけで、誰でも不死身になれるっていう、あれでしょ？

千草目を瞑り、静かに開けると天宮をジッと見る。

天宮 (ビクツとして)あの……。

千草 眠れないの。

天宮 ……まだ九時ですよ千草さん。

千草 おとついでから、寝てないの。

天宮 おとついでから？……じゃあ、三日三晩一睡もせずにごここで、それを？

千草 ええ、こうやってると眠れるって、本に書いてあったから。

天宮 ああ、あの、自己暗示ですか。この、「無意識」に働きかけるっていう。

千草 天宮さん、あたしこのまま一生眠れないのかしら……。

天宮 一生なんてそんな……ま、一生寝ないで働ければ朝は弁当屋、昼は会社員、夜はクラブのボーイ、

真夜中はセブイレブンのレジと、人の四倍の収入を得る事も可能ですがね。しかし、何故か人

っていう奴あ、クタバレますんでね。この、何もしないでただ起きてるだけだって何らかのエネ

ルギーを消耗するって言いますからこら人間、食って寝ないと死んじゃう訳で。

千草 ……。

天宮 千草さん、人間、夜は眠るように決まっています。昔々、電燈が発明される前の地球っての

は、こら、夜は真暗だったんですな。山には野獣が、海には……ええ、海には海坊主がおりまし

て、真暗で夜目の利かない人間どもはことごとく食われちまう訳です。そこで、神様は、夜はお

となしく家の中で眠るようにと、こう人を仕付けましたね。ハハハ……。

千草 ……。

天宮 あの、千草さん、運動量が足りないんですよ。一度クタクタになるまで、運動してみたら？すぐ

にコテンと眠れますよ。

千草 そう思つて、昨日、箱根まで歩いてみたんです。ひどく疲れましたが眠れませんでした。

天宮 ……。千草さん、あなた本当は眠りたくないんじゃないですか？何か、原因は判りませんが、心のどこかで眠りたくないという欲求があるんですよ。だから、それが逆暗示となつて、ますます頭がハッキリしてくるんです。

千草 じゃあ、通り魔に遇つた人なんかは、心のどこかに殺されたいという願望があるから事件に巻き込まれるんですか？

天宮 飛躍ですよ千草さん。なんでそんなにねじ曲げて考えるの？

千草 あたしは物事をストレートには考えられない性格です。万事物事には裏がありますのよ天宮さん。何故眠れないのか。あなたが言うような事だつてすべて考えてみました。しかし裏の裏を考えると、回り回つてどうしても元通りになるんです。裏の裏の裏。何故リアリズムが今日まですたれないのだと思います？それは事実と真実の間にギザギザに折り重なつた幾多の難解な問題を孕んでいるからです。判らないものは、そのままにしようとした方が無難なのです。いくら考えてみても、そうでなくても事実のひとつ。眠れないのです。

天宮 んん……。

千草 お座りになります？

天宮 はあ……いいえ、いいですここで。あの、千草さん、おとついの前までは眠れたんですか？

千草 ほんの少し。

天宮 どんな夢を見ました？

千草 分析なさるの？

天宮 これでも医学部の学生ですからね。だいたい事は判るつもりですよ、さあ。

千草 ええと……。

天宮 あんまり複雑なのはダメですよ。この前フロイト入門つてのを讀んだばかりですからね。なるべく典型的なのをね……、さあ、どうぞ。

と、懐よりメモ帳を出す。

千草 大きなブナの木の下に、右手にステッキ、左手に傘を持った山高帽の紳士が立ってるんです。

天宮 あらまあ！ブナの木、ステッキ、傘、山高帽、しかも、しかもその男は立っていたんですね、立って！いやあ、典型だなあ。勉強したかいがあつた。

千草 そして、その木の小さな穴の中から、ピストルを持った蛇が出てきまして、紳士の山高帽を撃とうとしたんです。

天宮 ちよつと待つて下さい。ピストルを持った蛇っていいますと、その蛇はどの手にピストルを持つてたんです？

千草 利き手ですよ利き手、だから右手ですね、こう……。

天宮 なるほどね、続けて下さい。

千草 やおら紳士は懐よりナイフを取り出して、蛇のお腹を切り裂くんです。そうするとその蛇の破れたお腹から、シャーペンシルがザクザクと出て参りまして、驚いた紳士は魚になって近くの噴水に逃げ込んでしまうんですよね。

天宮 噴水といえますと、そこは公園だったんですか？

千草 夢ですよ夢、天宮さん、いきなり現れたんですよいきなり。あたしは見た通りに話してるんですから。

天宮 なるほど、続けて下さい。

千草 その情景を空を飛んで見ていた私は、あたりに落ちている蛇の死がい、シャーペンシル、ナイフ、ピストル、ステッキ、傘、山高帽を、木の小さな穴の中に押し込めて、そのブナの大木を先の方から真ぶたつに引き裂いて目が覚めたんです。

天宮 千草さん、こらすぐ簡単に謎解きのできる単純な夢ですよ、そんなナニの象徴ばかり出てくる夢を見て、よく妊娠しませんでしたなあ。

千草 はあ？

天宮 あなたの眠れない原因は、欲求不満です。

千草 まあ！

天宮 先のがった物、凶器、それに伸びたり縮んだりする物、液体を噴射する物などはすべて男根を象徴している訳でこれらを全部ひっくるめて、この小さな穴の中に押し込めて引き裂くなんざあなた。男根願望、強姦願望、妊娠願望……（思いつめて）しようがない。御協力しましょう。

と、目を光らせ、ズボンを脱ぎかける。

千草 あたしも読んだんです。フロイト入門。

天宮 千草さん、から、から、からかったんですか。

千草 天宮さんが恥をかいちゃ申し訳ないと思って。

天宮 千草さんて、お、お話しが得意なんだなあ。ハッハッハッ。

千草 天宮さん、大学お休みなの？

天宮 （すかさず）今日は御家族の方達は？

千草 親戚の法事に行つてて、遅くにもどると思うけど。ねえ天宮さん、北海道からいつもどられたの？

天宮 （すかさず）こんな夜にひとり留守番なんて、どうして一緒に行かなかったんです？

千草 あたし噂話やスキヤンダルには閉口しますの。それに年寄りは一ひつこくて嫌いです。年寄りって、昔話はあきれくらゐ覚えていくくせに、子供の頃の傷付きやすい魂の事は簡単に忘れちゃってるのよ。あたし、誰とも会いたくないの。

天宮 皆、気は良いんですよ、精神回路がずさんなだけで。

千草 ねえ、天宮さん、まだお休みじゃないんですよ？どうして……。

天宮 ……千草さん、どうしてるかなって思つて……。

千草 わざわざ北海道から？

天宮 はあ……。

千草 変な人。

天宮 あのですね。

千草 天宮さん、私が好きなのね。

天宮 はあ……、あつ、いいえ、いや、あつ！あ、はいいい……こらまた……。

親戚一同後ろ側を踊りながら通り過ぎる。

天宮 少しでも眠らないと……、体に、悪いね。でも僕が来たからには大丈夫。僕の声の音質ってのは、

人間の体内をめぐる血液の循環音と同質のものらしい。それで、僕の声の聞こえと、みな胎児の頃の記憶を甦らせて、眠気をもよおすって……。

千草 誰が言ったの？

天宮 母と姉が……。

千草 あなたは声に抑揚がないだけよ、まるで声帯を潰されたブルドックなんだから。それで眠れるのは音痴な胎児だけでしようよ。

天宮 ……ド・レ・ミ・ド・レ・ミ、合ってるがなあ。

千草 あなた北海道からわざわざ音痴に箔を付けるためにいらしたの？

天宮 落ち着いてください千草さん、落ち着いて、ますます眠れなくなりますよ。

千草 あなたがいるから眠れないのよ。

天宮 千草さん、顔色悪いですよ。

千草 痛い！

天宮 どうしたんです？

千草 あなたが今、突き刺したのよ天宮さん。

天宮 えっ？僕、刃物なんか持ってませんよ。

千草 その言葉よ天宮さん、痛い、痛い、その言葉が痛い！あなたのその言葉が私の胸を突き刺したんです。

天宮 僕、今、何か言いました？

千草 顔色が悪いと言ったでしょ！今！……心配だったのよ、とつても、三日も眠れないなんて何か病気なんじゃないかって、とつても心配だった。そこへきて、第三者に顔色が悪いと言われる。ほら、そこで、完全に成り立つたでしょ、あたしが白血病だってこと！

天宮 ハッハッ……。

千草 嵐の夜に、いつか必ずやってくる北国の王子、白馬にまたがり、オーロラを越えてやってくる私の王子を待たずに、私はひっそりと死んで行きます。

天宮 僕がやって来たじゃありませんか、北国北海道から。牧場でアルバイトもやりましたから馬ぐらい乗れますよ、僕にだって。

千草 比喻ですよ天宮さん、金髪の美しい王子に値する人の事を言っているのです。

天宮 僕、美男子だって言われますよ、たまに。

千草 誰に？

天宮 母と姉に。

千草 あたしやつぱり死にます。さようなら。

天宮 ダメですよ、幽霊になった千草さんなんて、魅力ないと思うなあ。

千草 やだっ、幽霊なんて。

天宮 あれ？幽霊、信じません？千草さん。

千草 ええ。

天宮 どうしても？

千草 ええ、あれは無知な人間の思い込みによって造られた幻影です。

天宮 へえ……、あ、ちよっとオトイレを拝借。（行きかけて）それから千草さん、美しい人とか、美しいものなんてのはこの世に存在しませんよ。

千草 えっ？

天宮 そんなものを見ると石になってしまいうそですよ。だから見た人がいるとしても、今頃は石になつてゐるんです。美しいものなんて、無知な人間の思い込みによつて造られた幻影です。じゃ、ちよつと。

と去る。と反対の方向より、千草の弟泡夫が息を切らせて走ってくる。

千草 あらどうしたの？早かったじゃない。

泡夫 走つて来たんだ。恐かった。死ぬかと思つた。

千草 どうしたのよ、ちよつとあんた靴、靴。

泡夫 あつ……、お姉ちゃん、今日一緒に寝てもいい？

千草 やよ、あんたオネシヨするから。そういう顔してる日は、特に量が多いんだから。

泡夫、目ばかりギョロギョロさせて震えている。

千草 何があつたの？

泡夫 おじちゃんところでテレビ見たの。

千草 まあ、テレビ？おもしろかつた？

泡夫 ウツ、ウツ。

千草 うちも欲しいわねテレビ。お父ちゃんどこから持つてくりや良かつたのよねえ。お母ちゃんは、野球とか嫌いだからいいけどさ。あの、立教から入ったホラ、長島つての？素敵よねえ、あの人がいる限り、ジャイアンツは不滅よねえ。お母ちゃんたら白いの着てるのが善玉で黒い線が入つてるの着てるのが悪玉だろ、なんて、お芝居だと思つてるんだもの、やんなつちやう。

泡夫、泣く。

千草 ちよつと泡夫、どうしたの？

泡夫 キョ、キョーフのミイラ男っていうの見ちゃったの。

千草 えっ？

泡夫 恐いんだ、とつても恐くて、走ってきたんだ。僕もう、死んじやうよ。

千草 何それ。

泡夫 恐くて、恐すぎて言えないよ。死んじやうんだよ皆。ミイラ男を見ると、恐くて皆死んじやうんだ。

千草 バカね、泡夫は、そんなの作り事よ。いるわきやないのよ、そんなもの。

泡夫 いないのにどうしてテレビにあるの？

千草 みんなが見るようによ。

泡夫 嘘だい。

千草 ほんとよ。恐いのが好きなのがいっぱいいるんだから。

泡夫 嘘だ！ほんとにいるんだ、ほんとにいるからテレビに映ったんだ！ブラッシーだって大内山だつてほんとにいるんだぞ！

千草 あんた来年は中学生なんだから、ちゃんと物事の道理つてものを理解しないと。

泡夫 ウッウツ。

千草 泡夫！

泡夫 バカヤローバカヤロー！

千草 あっ！ミイラ男！

泡夫、姉にすがりつくと、姉思いきり弟をぶつ。

泡夫 バカヤロー、バカヤロー！（ひとしきりけんかした後、姉が勝って終わる）

千草 泡夫、折り詰どうした？折り詰。

泡夫 母さんが包んでたよ。あとで持ってくるよ。

千草 ならいいけど。また、虹ますの塩焼きかな。

泡夫 あ、そうだ。ホラ、天宮さん。

千草 え？

泡夫 天宮伸彦さん。あの北海道行ってる。姉ちゃんの二年先輩の天宮さんだけど。

千草 あら、天宮さんなら……。

泡夫 死んじゃったらしいよ今朝。

千草 ……。

泡夫 崖から落っこったんだって。

千草 ウソオ。

泡夫 嘘なもんか、僕もさつき聞いたんだ。叔父さんとその貢にいちちゃん、高校で同級だったんだって

ね。

千草 ……。

泡夫 なんか左腕がね、一本まだ見つからないんだって。どうも野犬がくわえてっいたらしいよ。北海

道のずいぶん山奥だったから。二、三人友達も一緒だったらしいけど、天宮さん空中で消えるよ

うにいなくなっただって、雪が降ってたから。空中で、二、三步、歩いているように見えたって。

テレビの漫画みたいだね。

千草 ア、泡夫お……。

泡夫 いい人だったのにねえ、天宮さん。千草さんは名前の通り、庭の草花のようにひっそりと愛らし

いって言ってたよこの前。去年プラモデル貰ったのになあ僕。

千草 （きつぱりと）泡夫、あんたトイレ行ってきなさい。

泡夫 なんだよ、まだ行きたくないよ。

千草 いいから（と、無理矢理背中を押す）。

と、天宮登場。

天宮 よつ、泡夫君、しばらく。

泡夫 ……

天宮 ちよつと背が伸びたかな？

泡夫 お姉ちゃんやっぱりミイラ男はいるんだよ。天宮さん、ミイラ男になっちゃったんだよ。

天宮 どうしたの？

千草 天宮さん、死んだなんてウソよね。泡夫ったら冗談ばかり。

天宮 ……

泡夫 天宮さん、左手見つかつたんですか？

天宮、はずした左手をガタンと床に落とす。

千草

泡夫 ……

天宮 （懐より本物の手を出して笑う）なんてね。

千草 あ、あの。

天宮 バレちゃ、しょうがないな。いやあ、今朝うっかりね。

千草 ー（つばを飲み込む）

泡夫

天宮 幽霊てな訳で。

千草
泡夫
ーキャーッ!

千草
泡夫、これは幻影よ幻影、幽霊なんていないんだから。泡夫、ゴーイング、ゴーイングって唱えるのよ、いい? そうすれば消えるから、本に書いてあったんだから。ホラ、泡夫。

千草
泡夫
ーゴーイングゴーイング、ゴーイング、ゴーン!

天宮
何やってるんです?

千草
あたし天宮さんち行って聞いてくる。

天宮
本人が言ってるんですから、間違いないですよ。

と、千草の肩に手をかける。

千草
(低く) 冷たい、冷たいわ、天宮さんの手。

天宮
雪が降ってましたからね、今朝は、だから冷たいんですよ。

千草
どうしてそんな怨めしそうな目で見るの?

天宮
幽霊ですからねえ。

千草
泡夫!

泡夫
(顔をよけて) ぶつなよ。

千草
こんな時にぶつけないでしょ。どうしようか泡夫。

泡夫
帰って貰おうよ。

千草
帰って下さい。

天宮
どこへ?

千草
来た所へ。

天宮
どしよかな。

千草 こんな所に居たって、時間の無駄よ。幽霊になったからって私の気持ちは変わらないんだから。

千草 ー帰って下さい。

天宮 千草さん、時間はもう永遠にあるんですよ。だから別に急がないんです僕……。

千草 あたしにどうしろっていうの？

天宮 別に、今宵一夜、楽しく過ごしましょ？

千草 なんかも明るいわね。今日の天宮さん。

天宮 そう、実際、死んで、性格が変わりましたよ。泡夫君、君、二重にかかる虹を見た事があるかい？

泡夫 二重について、ああ、あの二本いっぺんに空にかかる奴？

天宮 そう、夕立ちの後に稀にだが、一本の反射でもう一本そばに浮き上る虹さ。

泡夫 写真でならあるよ、もとの虹より弱くぼんやりとかかる奴でしょ？

天宮 うん。しかしだね、七色の並ぶ順序がもとの虹とちょうど逆になる、シ、ラン、セイ、リョク、オウ、トウ、セキ、まるで鏡に映ったようにね。今の僕はその反射した虹のように前の僕とは違っている。何でもできそうな気がしてくるんだ。何かエネルギーのようなものが底の方から沸いてくる気がする。もう何も恐いものなんかありやしない。千草さん、だから僕にはあなたを本当に眠らせる事もできる気がする。

千草 ほんと？

泡夫 バカだなあ姉ちゃん、眠らせるって殺す事だよ。生きるべき生をまつとうせずに死んだ人間は幽霊になって人に取りつくんだよ。取り殺して、生まれ変わろうってする、あれだよ。

天宮 ーキヤーツ！

千草 泡夫、あんた替りに連れてってもらいなさい。あたしここで見てあげてるから。

泡夫 やだよ、いつもそうなんだから。

天宮 泡夫君、僕はそんな卑劣な事はせんよ。僕は少年少女の味方なんだから。

泡夫 キョーフのミイラ男とは違うの？

天宮 違うさ、勿論、どっちかと言やあ、黄金バットの方さ。

泡夫 へえ……。

時計が十時を打つ。

天宮 十時だ、小学生にはオネムの時間じゃないかい？泡夫君！

泡夫 僕まだ起きてる！

天宮 泡夫君、これから先は、君らの世界の行き止まりだ。子供の君には日々十二時間の安眠が待っている。もうタイムリミットさ。

泡夫 まだ眠りたくないやい。

天宮 もうすぐ真夜中の魔女が起きる時刻だ。ホラ、あるまじき世界の歯ざしりが聞こえている。あるまじき音をたてて……。早く眠らないと、夜の十時の使者が君をさらって行くよ。

泡夫 そんな目で見ないでよ。

天宮 デレデロデン、ドロデラドン。

泡夫 ああ……、やめてよ、天宮さん。

天宮 デレデロデン、ドロデラドン、ドラレロドロランレン。

泡夫 お姉ちゃん……僕。

と、ぐったりとなる。

千草 泡夫、泡夫。

天宮 大丈夫、眠っているだけですよ。

千草 天宮さん、いつから催眠術なんて使えるようになったんです？

天宮、笑う、天宮、人が変わっている。

千草 天宮さん。

と、黒い馬に股がった、黒い騎士が通り過ぎる。

千草 天宮さん、今のは何です？

天宮 夜の十時の使者さ。間に合って良かった。

千草 あのこと……。

天宮 僕にできない事はないと、さっき言っただろ？

千草 天宮さん、妖術が使えるんですね？

天宮 逆方向のエネルギーですよ、あるまじき事の中で、あるまじき力を僕は自在に操作して、あなたを連れて行くのです。あるまじき場所へ。

千草 日々の生活の中から、私をさらって行くのですか？

天宮 あなたが望むなら。

千草 オーロラを越えてですか？

天宮 よおくごらん。千の星々の力を得て、逆さの方角へ千倍の力で駆ける僕の姿が見えてきたかい。

千草 ええ、天宮さん、あなたが金髪の王子に見えてまいりました。

天宮 僕と走るかい？

千草 ええ、どこまででも。

天宮 美しいものが見たいと君は言ったね。

千草 ええ、天宮さん、私は今、それを見えています。

天宮 さあ、一瞬にして果てしない、時の流れよ、幾千、幾万の空の旅人よ、来たれ。

白い馬の白い騎士、赤い馬の赤い騎士、黒い馬の黒い騎士が、何度も何度も舞台を横切る。

千草 天宮さん、あれは何ですか？

天宮 夜の光、夜の太陽、そして夜の闇。皆、僕らの時間なのさ。

千草 天宮さん。

天宮 千草さん、もう尋ねてはいけない。君はもう二度僕に尋ねた。君が僕に尋ねられるのは三度まで。それ以上尋ねると、僕の術は消える。いいかい忘れるんじゃないよ。

千草 どうして？

天宮 三は時間の数、過去現在未来を孕んだ三人の天使の数だからさ。四は逆さの数、だから、四つになると逆さが逆さに術をかけ、逆さの時間は消えるのさ。ホラ千草さん、もう二度目だ、もう何も聞いちゃいけないよ。

千草、口を押さえて領ずく。さきほどの馬に乗った三人の騎士、オーロラとともに登場する。

天宮 さあ千草さん、オーロラを越えるよ。

千草 どうやつ……（と口をおさえる）。

天宮 なんですか？

千草 なんでもない。

天宮 大きく深呼吸、息を止めて、ドロデラデン、デロドロデン、ヤアーツ。

と、二人逆立ちして、オーロラの中に消える。

巨大なオーロラとともに人々消えると、四角い三尺四方の箱現る。

泡夫の小さな「秘密の小箱」に逆さの術がかかったのか。
泡夫ゆつくりと起き上がる。箱の中より目映いばかりの笑みを浮かべた少女が現れる。

泡夫 君は誰？

少女 君は誰？

泡夫 僕は泡夫。

少女 泡夫？

泡夫 そう、泡夫。

少女 泡つて、ウタカタの？

泡夫 そう、ウタカタ、霜月泡夫、十一月のアブクです。冬でもない秋でもないそんな中途の嫌な季節に、ちよつとたつてはすぐ消える、そんなはかない男です。

少女 ハハハ、いいお名前。

泡夫 アワオ、アワオ、と続けて読むと、アホウアホウと聞こえます。

少女 ハハハ。

泡夫 だから僕を呼ぶ人はみんな小鳥になるんです。母鳥焦がれて森から森へ、毎度飛び立つはぐれ鳥、悲しい定めのおほう鳥になるんです。だから僕は逆に笑い返してやるんです。だって僕を呼ぶ人はみんなアワレな顔になるから。アホウアホウと悲しく顔が歪むんです。

少女 あの、泡夫さん。

泡夫 そう、泡夫です。

少女 あの。

泡夫 早く喋つて下さい。こうやっているうちにもはかなく消えるかも知れぬ。そんな刹那の男です。少女 気に入ったわ泡夫さん。永劫の闇の中で刹那の夢を語るのもあたし達の定めかもしれないもの。ウタカタの恋に泣きましよう泡夫さん（としたたかに言い切る）。

泡夫 恋に？

少女 ハハハハ、男と女がこうして出会ってどうして恋せずにはいられましょう。見て見てあたし達、町のポスターよりもさわやかだわ。

泡夫 そうですかね。

少女 ホラホラ、こうすると、こうなる、こうなる、こうなる、スルリ、スルリとすり抜けるこの空を見てごらん。あたし達がいるからよ。恋に泣かず、何に泣くのか？泡夫さん。

泡夫 あなたほど怨念を感じさせない女の人は見た事ありません。

少女 オンネン？

泡夫 女の人は、生まれながらに魔的なものをかかえているので怖いのです。あなたは恐ろしいほど陽気で身軽だ。あなた本当に女の人？

少女 ハハハハハ。

泡夫 (泣いて) 僕、女の人とこんな風に話したの初めてなんです。思った通りの事を女の人に話せるなんて知らなかった。

と、両手で円を作って、額の前に差し出す。

少女 何をしてるの？

泡夫 これが恐くはありませんか？

少女 いいえ、何かのオマジナイ？

泡夫 魔物は円を恐がるのです。どこから見ても完結した形、まるで尾をかんだヘビのようにまるく納得した形、女の方はそれを恐がるのです。

少女 どうして？

泡夫 それは自分自身だからですよ。真実を押し殺した醜い思い込みを嫌うのです。だってその円の中には、自分自身の姿が封じ込まれているのですから。

少女 ハハハ、哲学の泡夫さん、それならその手を取りましょう。

泡夫 あったかいや。
少女 このぬくもりは頭の中には入り込めない。あんまり考えちゃダメよ。

と、ギョツと手をにぎる。

少女 頭の中は冷たいんだから。

泡夫 ええ？

少女 頭寒足熱というでしょ？

泡夫 はあ……

少女 それが恋というものよ。

泡夫 恋は足でするんですか？

少女 そうよ、あったかい足で。頭は使わないでとつとくの、のちのちのために。もつとも恋愛期間は頭がどつかへ行つちやうのが常だけど。

泡夫 その頭はいつ帰ってくるんです？

少女 別れた時よ。しばし頭を預けなさい。別れるまでさましといてあげるから。さました頭で考えれば、おのずと道が開けるでしょう。

泡夫 恋は下しもの方だけでしろとおっしゃるんですか？

少女 できればねえ。

泡夫 傷つかない恋があるんですか？

少女 ハハハ文学の泡夫さん、手を離しますよ。泡夫さんたら！

泡夫 君は誰だ、ヒラリヒラリと身をかわしながらいつの間にか僕と身を重ねる、そのこざかしい技をどこで覚えた！さあ言うんだ、言うまで離さない。

少女、逆にねじり倒し、泡夫に馬乗りになる。

少女 あなたがひとつの力を出せば、その力は二倍になってあたしの中に生まれます。あなたはあたしにかかないやしない。

泡夫 くそう。

少女 ハハハ、具体の泡夫さん、あたしは抽象の泡生です。

泡夫 えっ？

少女 あなたがあぶくの男なら、あたしはあぶくから生まれた女、時が満ちればまた海に返る、薄幸な人魚の精かもしれません。

泡夫 こんな時に冗談か、やっぱり女だな。

少女 ほんとうよ。

泡夫 人魚は口が利けないんだぞ、僕ちやあんと知ってるんだ。

少女 あなたが喋れば口を利く、あなたの話した二倍の話を話します。

泡夫 何を言っているのか判らない、そんな解けないナゾかけ遊びで僕をからかったりしないで下さい。

少女 ウソ、あなたは知っている。夜には星、海には魚、あなたにはあたし、そんな抽象が私です。

泡夫 そうか、これは夢なんだな、内的精神構造なんだな、ならば消えろ！消えてしまえ。

女、箱の中に消える。

泡夫 悪い夢だった。うっかり信じ込むところだった。あつ、姉ちゃん、お姉ちゃん、なんだこの胸騒

ぎは！さつき天宮さんは逆方向のエネルギーが千倍になり、あるまじき事の中のあるまじき力を自在に操作する能力を得たと言った。それは……妖術に似たものだ。ならば姉さんは天宮さんの妖術の中にめり込んで行ってしまったのだろうか。不眠症の姉さんが、安らかな眠りにつくための妖術、天宮さんは何と引き替えにそんな術をしかけたのだろうか。

そして僕は……、捨てられたんだ。僕ひとりが、夜明けに四畳半からもれる衣ずれの音とか、昨日貰った十姉妹じゅうしまつのえさの値段なんかを気にしながら、この白つ茶けた生活の中をいざつて行くの
だろうか？それなら、夢よ醒めるな！僕の十二時間の安眠よ、飛びたつ天使賊にさらわれる！僕は眠りなき夢の中で、この茶色の毛糸の靴下のまま、どこへでも、どこへでも！

と箱の中よりさきほどの少女ポンと飛び出す、その姿はまるで泡夫そのものだ。

泡生 ハハハハハ。

泡夫 君は誰？

泡生 君は誰？

泡夫 僕は泡夫。

泡生 僕は泡生。

泡夫 変身したな。

泡生 僕は僕さ。

泡夫 人魚の精だなんて、少年の心をくすぐっておいて、とんだ化物だ！

泡生 十二時間の安眠と引き替えに夢の続きが見たいと言ったのは君じゃないか。だから僕は入れ替わったのさ、この秘密の小箱の中でね。さっきの人魚は君さ泡夫君、愛する者の命の代償として永遠の魂を約束されるあのお話。王子を刺せなかったあのお姫様は海のアブクになったって。どうだい？僕を刺さなきや君はほんとのアブクになってしまっぜ。ハハハ、君は人魚、僕は泡生、さあ、僕を消せるかい？

泡夫 何だつて？

泡生 君が僕をつかまえない限り、君はただそこに、いつまでも置いてけぼりさ。ただ陽炎みたいにかすんでいく、ちっほけな影が君さ。

泡夫

お前が僕の影だろ？お前なんか踏んでやる！

泡生

知らないの？泡夫君、晴れてても出来そで出来ない夜の影踏みつてさあ。この闇の中で、君の影が踏めるのかい？

喪服を着て数珠を持った親戚一同踊りながら通り過ぎ、泡生その中に踊りながら消える。

泡夫

（あたりを見回して）ほんとだ。どっか行っちゃった。僕の影法師。そして、僕の回りのあつたかい日々の暮らし。暗い、真暗なんだ……。この手も、この顔も誰にも判らないほど……。目を閉じて、又開いても、決まりのない程の闇。でも僕はここにいる。そうか、これが逆さの妖術なんだ。真昼のお星様。真夜中の太陽。眠りなき夢。何かが何かの影になり、どこかで形無き者が、声にならない独り言を呟きながら、きちんきちんと過ぎて行く自然の営みを逆さから見返すんだね。ちいちゃな僕の夜の影法師を、僕はこの目で見なくちゃならないんだ。……。なんだ、今通り過ぎていったものは、首筋をスツと擦くすくるように過ぎて行つた奴は。……。妖気か？……。時間だ。こうしている間にも、何か、僕を忘れようとして、時計のネジを巻いたんだ。僕はここにこうしているのに、小さな歴史は闇の向こう側で、ビュンビュン駆けて行く。……。お姉ちゃん！

方々から泡夫を呼ぶ女の声がし、舞台一面真白の闇となる。男達の笑い声が聞こえ、そこは画家マニーの陽気なアトリエである。

〈画家マニーの陽気なアトリエ〉

幕開きの千草の顔のキャンパスの前に座る画家マニー（駄才オサム）と弟子の、靴屋の白兔・イミプラミン（神前照夫）、仕立屋の黒兔・ヒドラジン（金田明）が、パーミントティーを飲みなが

ら腹をかかえて笑っている。執事の五郎兵衛、お茶を注ぎ回って静かに退場する。
場面は、何か、旧式な近代劇の色合いを帯びている。それは、登場人物の仕草に所々現われる
ドキリとするほどの古風なデフォルメが、そう思わせるのかもしれない。

マニー ハッハッハッ。君。この、丸と四角とどっちが好きだね。

白兔 いいいますと？

マニー まああるいものと角ばつたものとだよ。

白兔 答えたくありませんね。

マニー なんで？

白兔 丸つて言うのと、角のない奴あ男じゃないとかなんとか、四角つて言うのと、人間丸くなくちや世渡り
りはできんよ、とかね。あなたいつもそうだ。僕は傷つけられるのはもうごめんです。

マニー ひねくれとるねえ君は。

白兔 あなたと会うまではまつすぐでしたよ。

マニー つまらん奴だ。会話にならん。君、君はどうかね。

黒兔 ……。

マニー ビクビクするんじゃない。私はただの図形の事を言つとるんだからね。何も人生論を戦わそう
なんて野暮な事は思つとらん。単なる丸と四角だよ。子供じみたお遊びですね、君、答えなさ

いよ。答えないと、ヒドイよ。

黒兔 ……四角です。

マニー なにに!?

黒兔 あの……。

マニー 訳を言いなさい、ええ？理由はなんだ理由は！まさか、ただ何となくとか感じてフツとか曖
昧な事は言わんどうな。四角のどこが、ええ？あの四角のどこが好きなんだお前は！

黒兔 丸は、掴み所がありませんでしょ？この、どこが初めて終りやはつきりしません所が生理的に

嫌でして。あの、そこいくと、四角はこう、その点前向きでして、このこう、一気に始まって、一度力を出し切った後に、スツと力を抜きますと、折れ曲がりましょう？この折れ曲がった時点で、また別の道が始まる訳です。つまり今来た道を角度を変えて、別の方向へ生きてみようとする意志がここで自然に働いた訳ですね、そしてようやくやって参りますと、また別の暗示によって一瞬つまづくのですね、そこで、待てよ、と考える。こんな風で良かったのかしらとね、それでもう一度、ガクンと九十度、今来た道の方へ引き返す訳です。そうすると、だんだん己れの仕事が判りかけて参りましてね、自分の生きるべき道といったものが、ここにあるのじゃないって事を悟る訳です。そこで力を振りしぼり、今度は逆さの方向につまり原点に戻ろうと必死にあがく訳です。ああ、もうちよいだ、もう少しだ……ホラ着いた。ね。着いたんですよ最初の点に、今、まさに初めの場所と結合したんです。やつとたどり着いたんですよ。己れというものに。良かったなあ！

マニー 君は、私の絵を批判してるんだな！

黒兎 はっ？

マニー 所詮、古典主義にはかなわないだろうと、私を小馬鹿にしてるんだな君は！君に、君なんか私の、この私の絵が判ってたまるか。青二才め！

黒兎 先生、僕は図形の好みを言っただけです。先生の絵の事なんかなんにも。

マニー なんかだと？絵の事なんか？

黒兎 先生！

マニー 私は先生ではない何度言ったら判るんだ。すべての画家は己れ自身が師匠たるべきである！絵画とは教えるものでも教えられるものでもなあい！すなわち、絵画の世界に先生はない！先生、先生と呼ぶその裏側にはだな、「このヤロウお前なんか死んじまえ、お前が死ねば今度は俺が先生なんだぞ！」という悪意と侮蔑が潜んでおる。この繰り返しだが、今の絵画の世界を墮落させたんだ。今度私を先生と呼んでみる……ヒドイよ。

黒兎 すみません、でも四角という図形は素晴らしいのです。この考えは譲れませんよ。

マニー ほほう頑固な奴だね君は、これ程までに言っても改心する気がないんだね。

黒兎 ここにあるこの本だって、この絵画ですら四角じやありませんか。何故です？それはここに、きちんと止めがはいるからですよ。見て下さい、この安定感！丸に、丸にこんなマネができますか？いや見事だ、美しいねえ四角は。

マニー ウ、ウ、ウーン……。

白兎 マニーさん、マニーさんは、丸がお好きなんですか。

マニー あ、あ、あたり前だ！丸はねえ、丸はねえ、丸はまあくて可愛いんだぞ！オッパイだって、オシリだってまああるんだ。私だって君達だってまあある穴の中から生れて来たんだぞ。まあいいお腹の中に十月十日、まああるくなって入っていたんだ。君らにや、丸の原理がちつとも判っていないんだよ。

白兎 だからあなた、満月の夜に太鼓叩いて踊り回ったりするんですね。

マニー そうか、イミプラミン君、君、良い事を言ってくれた。だからだったんだなあ、いや、やっと判ったよ。何か満月になると股のあたりがムズ痒くなってきてね、昔からじつとしてらんなくなるんだが、お月さん、まああるものねえ。

黒兎 (白兎に)お月さんは、女の穴だったんですか？

白兎 マン月というくらいだからね。いや、男の穴はあんなに大きく伸びないだろうからね。

黒兎 実験してみますか？

白兎 やだよ、痛いから。

マニー ちよつと待て、ダメだ、ダメだ。お月さんは半分になったり先つちよだけになったりするじゃないか。ダメだ、ダメ。私は最初から最後まで永遠に丸いものしか認めん！君だめだよ嘘ついちや。

白兎 しかし天体は皆丸いんですよ。この地球のように。こら、半永久的に丸いんです。

マニー 君、私はこの目で見えたものしか信じんのだ。見たものこそ真実、見えないものは皆ウソなのだ。

君は地球が丸いのをその目で見えたのか？ええ？じゃなぜ、地面は平らなんだ！何故この花瓶の水がこぼれんのだ。地球は平らだ。私は目で見て知っておる。

白兎 し、しかし、探検家が調べたんですよ、地球は丸くて回ってるんです。

マニー しかし私は見ていない。それを見た者の地球は丸いかも知らんが、私の地球は平らだ、断じて平らだ。

白兎 いやマニーさん、恐るべき写実主義感服致します。

マニー 当たり前だ。レアリズム以外の芸術は皆豚の尻尾だ。ハッハッハッ。

白兎 今度、鏡餅と草加せんべいお持ちしましょう。丸くっておいしいですよ。

マニー バカ者！鏡餅もせんべいも食べると丸くなくなるじゃないか！特に、せんべなどは、ボリボリかじっているうちに醜い角がいくつも出来て、暗い気持ちになってくる。そのうち完璧な丸をボリボリ破壊しているのが、紛れもないこの自分自身だという事に気付いた時、私は闇の中に放つぽられたような気がしてくる。そこにあるのは死だけだ。私が、瞬きをしない人間だという事を君は知ってるよね。

黒兎 ええ、さつきから良くもつなと感心してました。

マニー 私だつて瞼を閉じたいよ。ホラ、ちゃんとあるんだからね（と引っぱって）しかし、このまあるいおめを塞いでしまうのが惜しいんだ。せつかくの丸が閉じるとただの線になるんだよ君、そんな事が許されていいの？

黒兎 でも、どうやって眠るんです？

マニー ハッハッハッ、人間、訓練してやれない事は何も無いよ。私は断じて眠らん、目を閉じなきゃ眠れんなんて、原始人だよ君、これからの人間は皆、目を開けたまま眠るようになるよ。いや、目を瞑る余裕などなくなってくるだろうよ、これから時代はどんどん変わる。驚くべき早さで進歩し、進化していくのだよ、それを見すごしちゃ、おいてけぼりをくうよ、ヒドラジン君、目を瞑るなんて鈍臭い事やってちゃあ、あんた、芸術家とは言えんよ。これから人間の目はま

すます皿のようにまんまるくなっていくのだ。ハッハッハッ。丸だ丸だ。丸なんだよ。君！

執事登場。

執事 マニー様、クロルプロマジン様がおみえです。

マニー 何だつて？

執事 今度の新作をサロンに出品する前にぜひ拝見したいと、もうそこ迄おいでです。

マニー お通ししたまえ、皆無礼のないようにな。

クロルプロマジン(霜月龍之介)登場。

全員 ははあー(と土下座する)。

クロルプロマジン おもてをあげい！

全員 ははあ……。

クロルプロマジン マニー君、このような作法、私には無用じゃ。私を古典派のじじい共と一緒にせん
でほしい、私は魂の画家、クロルプロマジンじゃ。

マニー しかし先生！

クロルプロマジン マニー君、君も若い、私も若い。さあ立つて、肩を並べよう。

マニー 先生！なんとお優しい、なんと寛大なるお言葉、身にしみて御座居まする。

クロルプロマジン よいよい、とにかく拝見つかまつろう。

黒兎 先生と呼んでますね。

白兎 死んじまえばカヤローと思ってるんじゃないの。

マニー これにて存じまする。

クロルプロマジン んん……。

マニー いかがでございます？

クロルプロマジン 四角い。

マニー は？

クロルプロマジン 完結しておらんよ、君はこれを丸だと思っておるようだが、そら、イリュージョンに過ぎない。

マニー 恐れながら、私は見たまま、ありのままを絵に描くだけです。そこに迷いがあるとおっしゃられるのか。

クロルプロマジン ロマンだ、ロマンだよ君、空想の翼を広げるのだ。絵画とは眼の為にあるのではない、心の為にあるのだ。

マニー んん……。

クロルプロマジン 君の絵は当り外れが激しいねえ。ええ？君の場合、何を描くか、この時点での選別が問題なんじゃないの？絵の良さじゃなくて、物の良さ、つまり偶然の賜物なんだな、君のは、じゃ僕は帰るから。

マニー せ、先生！

クロルプロマジン 冷たい正確さは芸術ではない。さらばじゃ(と去る)。

全員 マニーさん。

マニー ハッハッハッ。私の絵を審判する者は私以外にはない！私は芸術の為の芸術を描くのではなく、私の精神的な自由を獲得するために描くのだ。私を超える画家などこの世にやおらん！これ程社会を独創的に描写し、表現する力を持つておる画家は他にはおらん。これは断じてそうである。この絵は完璧に丸いのである。ハッハッハッ。

全員拍手。

マニー ……私ほど思いあがった人間はこの世にやおらん。それも確かだ……。

とイスに座り、うなだれながらも、絵に向かい手を加える。

妻(歌子)と娘1、2、3(緋鶴、マリ子、貢)そして娘4に化けた泡生(弥生)が登場する。

妻 お食事よお食事。

マニー 仕事中だ。

妻 マニー、お食事！

マニー 仕事中の私にめしを食わせる気か、貴様は！私の才能を潰す気だな？

妻 才能が潰れても餓死するよりはましでしょ？さ、マニー。

マニー 私はマニーではない、たった今から名前を変えた。

全員 なんて変えたんです？

マニー メランコリーだ。

あたりの人間、飛び退く。

黒兎 白兎 弱りましたなあ。

娘1 ダデイ、今日はダデイの好きな、永久式目玉焼に、デザートは球型プリンよ。

娘2 機嫌を直してダデイー。

娘全員 一緒に食べましょう。

マニー ……誰だ……お前達は……。

娘全員 ダデイー！あなたの娘達じゃありませんか？

マニー ……私は独身主義者だ。妻や子供等、芸術の妨げになる者を持った覚えはない。

妻 また始まりましたわ。この人の病気が。

マニー ……頼む、出て行ってくれ……お願いだ……。

妻 あなた、泣かないで、あなたの絵は最高よ。社会がどう言おうと、私達はあなたを信じています。

娘1 そうよダディー、ダディーは天才だもの。

娘2 一度や二度の失敗は誰にだってあるわ。

娘3 それを乗り越える根気よ。

娘4 根気こそ天才だつてよく言うじゃないの。

娘1 ダディーは今スランプなのよ。

マニー 一度や二度の失敗だと！プロに失敗が許されると思っているのか。……ダメだ……ベッドだ……横になりたい……。

壁に組み込まれていたベッドを降し、皆マニーを横にさせる。

執事 メランコリー様、お医者をお呼び致しましょうか？

マニー 医者だと！病んだ芸術家に向つて医者とはなんだ。勝れた芸術家は皆、病気と背中合わせに生きておる。皆病魔と戦いながら、生命いのちをふりしぼつて、絵筆に託す。これが一流の芸術家だ。治さんぞ、私は絶対に治さん……（泣いて）絵がだめなら病気で一流になつてやる……くそう、耳を切つてでも一流になつてやるぞ……。

執事 かし……。

マニー 引つ込んでろ、くそじじい！

娘達 ダディー！

マニー ああ、手が震えてきた。指が動かん……ホラ、ホーラネ、もう絵筆を握る事が出来ない。……ダメだ……こうなつたら、自殺だ！自殺してでも一流になつてやる……。

妻 あなた駄目よ、弱音を吐いちゃ。思い込みよ思い込み。あなたは世界一の画家なんですもの。すぐに良くなるわ。さあ、これを掴んで。

と懐より、先に千草が持つていた結び目が二十あるヒモを取り出しマニーに手渡す。

妻 口に出して唱えるのよ、デイバイデイ イン エブリウエイ アイムゲテイニング ベタア アンド ベタア
アさあ。

音楽。唄。

妻 デイバイデイ イン エブリウエイ アイムゲテイニング ベタア アンド ベタア 雨の日 風の日 嵐の日

日 朝晩かかさず唱えるの そしたら不思議 アラ不思議 たちまち治るわ なにもかも

娘達 デイバイデイ イン エブリウエイ アイムゲテイニング ベタア アンド ベタア

白兎 歯痛、リュウマチ、ビッコにセムシ

黒兎 子宮後屈。三つ口、鼻かけ

妻・娘達 デイバイデイー

白・黒兎 メニーメニー

妻 イン エブリウエイ

娘達 メニーメニー

白・黒兎 アイムゲテイニング

妻 メニーメニー

娘達 デイバイデイ

妻 メニーメニー

白・黒兎 イン エブリウエイ

娘達 メニーメニー

全員 ベタア アンド ベタア



1986年の再演より、左から村上靖尚、渡辺えり子、竹内久美、中進。

白兎 おでき、犬つき、キツネツキ

黒兎 つちのこつきに 血の道 舞踏病

娘達 デイバイデイ

妻 メニーメニー

白・黒兎 イン エブリウエイ

娘達 メニーメニー

妻 アイム ゲテイニング

白・黒兎 メニーメニー

全員 ベタア アンド ベタア

間奏。

妻 誰もが知らずに死んでいく、おろかにひっそり死んでいく。けれど、今日からおやりなさい、恋の病もキ印も、治らぬ病は、なにもない。

娘達 いつでもなんでも、たちまち、すつかり。

妻 雪に埋れた四月のバラが、いつかきつと芽生えるように。

娘達 必ず、すぐに、あつと、いう間に。

全員 良くなるわ。

唄の間、指を震わせながら、ヒモを手繰っていたマニー、スツと起き上がり、又、倒れる。

全員 (ため息)

白兎 アイテムゲティング
全員 メニーメニーベターアンドベター！

と突如床下よりミイラ男の扮装の天宮と、千草登場。

天宮 ー今晚は！
千草 ー今晚は！
全員 ……今晚は……。

瀕死のつもりでマニー起き上がる。

マニー 君等は何者だね。

天宮 ボードレールです。

千草 ジョルジュ・サンドです。

天宮

千草 ー百科事典の時代考証を経てやって参りました。

マニー ドラクローアさんはいないよ。

天宮

千草 ーじゃあ、さようなら。

黒兎 今のは何です！

白兎 この話がノンフィクションだと言いに来たんだらう。

黒兎 何となく、話に説得力が出てきたようで嬉しいですね。

白兎 せっかくだ、呼び戻そう。

黒兎 どうやって？

白兔 マ、メランコリーさん、お願いします。

マニー 地の上遙かに高く、谷の上遙かに高く、山、森、雲、海の上、遙かに高く、太陽を遙かに越えて、エーテルを遙かに越えて、星散りばへる天球の、はたてを越えて。

天井より天宮、千草、降りてくる。

天宮 軽快に、我精神よ、汝は翔り、飛び翔れ、遙かに遠く、瘴癘の妖気を越えて。
千草

マニー (ぐつたりとなつて)……いつ聞いても君の詩はすばらしいよ。詩人の中の詩人だなあ。

天宮 あなたの絵ほどではありませんがね。

マニー ハッハッハッハッ、そうなんだよ、ええ？飛翔、飛翔だよ君、いつだって飛んでなきやねえ、芸術家は。世俗の垢を拭いさり、精神の海を、航海せねば、ねえ！ハッハッハッ。

全員 メランコリーさん！

マニー バカな、私の名前はマニーだよ、マニー！ハッハッハッ。

千草 (マニーにささやく)あの、駄才さん。

マニー ん？

千草 駄才さんでしょ？

マニー 私は天才だ、駄才などではない。

白兔 ダサイ天才だけどね。

マニー なに？

天宮 いや、芸術家つてのは皆野暮ったいもんですよ。わざと私生活はダサク過ごして、作品に、ハイカラなセンスをね。

娘達、口々に「ハイカラだって」「ダサーイ」云々。

天宮 芸術家は皆、寡黙な地方出身者ですからな。

白兎 東北の厳しい冬の寒さを乗り越えるエネルギーがなくなっちゃね。

マニー そ、そ、都会人は皆、口ばっかりで。

千草、マニーをジッと見つめている。

マニー 何だよ君、照れるじゃないか、星を散らすな、星を。

千草 ……ごめんなさい。

天宮 千草さん、道草はダメですよ。僕等にや使命があるんだから。

千草 え？あたし知らないわよ。

天宮 山奥の井戸の中に閉じこめられた美しい王女を救いに行くんでしょ？

千草 やだ、いつからメルヘンになったの？

天宮 僕は金髪の王子なんですよ、だから二人で馬に乗ってオーロラを越えたんじゃないですか。

千草 あたし達、正義なのね。

天宮 そう、この世の悪を滅ぼすんですよ。

千草 悪を？

天宮 複雑でない、誰が見ても悪だ悪だと声を揃えて罵るような単純な悪をです。

千草 猪突猛進の正義ね。

天宮 文部省推薦ですよ。

マニー 退屈だ。誰か事件を持ってやってくる人物はいないのか？ええ？倒すべき悪もないじゃないか
ここには？

白兎 もう駒は出揃いました。



1986年の再演より、ピストルを構える泡夫。

クロルプロマジン登場。

マニー 先生！どうしたんです？

クロルプロマジン「ワアー」と叫んで皆の中を走る。
ピストルを持った泡夫登場。

泡夫 手を上げろ！

全員 ええ？

泡夫 聞こえないのか！手を上げろ！

全員、テーブルの上に、ガタリと手を置く。

泡夫 (拍子抜けして) 何をやってるんだ。

全員 手を上げているのです。

泡夫 バカな。手は上に上げるのだ。

黒兎 上に？

泡夫 そうだ、上に、両手を高く掲げるのだ、手のひらを広げてピンと上にね。

白兎 じゃあ初めからそうおっしゃればいいのに面倒な。

泡夫 決まってるんだ！

娘1 誰が決めたんです？

泡夫 初めからそう決まってる。

クロルプロマジン 知りませんよ、そんなこと。

泡夫　じよ、常識だ！

妻　誰が決めた常識です？

泡夫　暗黙の常識だ！

全員　ガヤガヤ。

泡夫　早く手を上げろ！

娘2　右からですか？それとも左から？

泡夫　何が？

娘3　手ですよ、両方上げるんでしょ？

泡夫　バ、バ、バ。

娘4　どうなんです？一般の常識では。

泡夫　両方いつぺんに上げるんだ！

全員　両方ねえ。

泡夫　はやくしろ！

白兎　足はどうなんです？

泡夫　あ？

白兎　この、右足を出すとか、揃えるとか、座るとか。

泡夫　足なんかどうだっていい、手さえ上げればいいんだ、手さえ。

白兎　そんなあなた、決めて貰わなくちゃ。

妻　そ、見た目もありますしねえ、揃ってなくちゃみつともないんじゃないやありません？

マニー　手さえ上げりゃいいなんて、小学校の授業参観日じゃあるまいしねえ。

全員　（笑う）

泡夫　何も盆踊り大会をやるうてんじゃないんだ、手を上げりゃいいんだよ、サツと。

娘1　サツとねえ。それはスピーディーにすること？それともシャープな感覚でって意味？

泡夫　普通は、オロオロした感じで、こう恐る恐る、頼りなげな感じで上げるんだ。そう、一、二歩し

りぞいてもいい。

マニー なあんだ、決まってるんじゃないか。

娘2 やあねえ、あたし達に恥かかそうとして。

妻 それなら、おもむろにとか、雪だけの小川のようにとか言っていたただかなくちや。

泡夫 君達は、今の君達が置かれている状況を良く把握してないようだな。

娘1 あら、あなたどこかお悪いの？

黒兎 頬が引きつってる。

マニー 人見知りしてるんだよ、そりや、初めてお会いするんだ。こちらは多勢なんだし、緊張しない

人はいないさ、ねえ。

泡夫 手、手、手を上げろと言ってるんだ。

マニー まあまあ、あなた、そう興奮なさらず、そうだ、君が見本を示してくれたまえ。

全員 そうね、それがいいわ(等、口々に)

娘1 あたし達あなたがやる通りに出来ましてよ。皆リズム感がいいんだから、ねえ。

全員 (拍手して笑う)

黒兎 僕、出来るかな、体育も音楽も2だったし、ワntenポ遅れでもしたら……。僕、顔が真赤にな

るんだよ。赤面恐怖症つての？あれなんだ、遅れても笑わない？ねえあなた。

クロルプロマジン 私だけ数学の問題を解かせてくれないかねえ。そっちは自信があるんだ。珠算だつ

て一級なんだよ私は、暗算でも億の単位まで出来るんだぜ。

全員 まあ。

泡夫 バ、バ、バツ。

マニー (ヒトラジンとクロルプロマジンに) 大丈夫、できますよ。そんなにむずかしい振りじゃない

もの。ねえ。さあ、君、早くお手本を。

全員 (拍手)

泡夫、手を上げて見せる——と全員で襲いかかり、マニー羽交い絞めにして、ピストルを奪う。

泡夫 騙したな！（姉の千草を見て）ぶつなよ！ぶつなよ！

マニー あら、君知り合い？

千草 いいえ。

泡夫 姉ちゃん！

千草 あんた何語で喋ってるのよ。

泡夫 日本語に決まってるじゃないか！

千草 バカねえ、ここはフランスなんだから、フランス語で喋らなきゃ通じないわよ。ねえ。

全員 その通り！

泡夫 今まで通じてたじゃないか！

マニー カンですよカン、カンで喋ってただけですよ。

白兔 みんな頭良いんだから。

泡夫 んなバカな。

突然、一同フランス語っぽい会話を始める。

千草 あんたどうやってオーロラを越えたの？

泡夫 オーロラ？

千草 どうやってここまで来たのよ。

泡夫 僕はただ、僕の影法師を追いかけて来ただけだ。果てしない、四畳半の迷路を駆けてきただけさ。

お姉ちゃん、今の僕の場所にいるのはね、ニセ者なんだ。そいつを引っこ抜かなくちや、僕は僕
の場所に帰れないのさ。

千草 それ、どこに居るのよ。

泡夫 ここさ、僕追っかけて来たんだもの。

千草 ここ？

泡夫 この中の誰かが、僕のニセ者なんだ。そいつは変装が得意でね、僕の考えが生み出す、どんな者にも変装できるんだぜ。

千草 それを見つけてどうするの？

泡夫 殺すさ。だって死ぬか生きるかだもの。殺^やらなくっちゃ殺られるのさ。

千草 それで、あんなピストルを。

泡夫 角の店で買った大福さ、あれ、走ってるうちにピストルになったんだよ。

千草 逆さの術がかかったのね。

泡夫 やい、泡生と名の僕でない僕。僕の皮の上に被った化けの皮を剥げ！

娘1 ダディーこの子何言ってるの？

マニー 君、フランス語で話さない。

泡夫 何がフランス語だ、ダディーなんて英語じゃないか。フランスでは、父上の事はモンペールって言うんだぞ。

マニー まあ、固い事言わんで、せっかく、ダンディに決めてるのに、モンペ、モンペ言われちゃ、田舎に帰って良い観客にならずにちやいけなくなるだろ？

泡夫 インチキ！

マニー まっすぐだね、少年よ。青年になったら大志を抱け。

白兔 中年になったら大志蹴とばして埋もれる。

泡夫 うるさい！

マニー 良し良し、しかし、君の探してる相手などここにはおらんよ。

泡夫 ウソだ！

マニー いいかい君、私はフランス一の画家……いや、こちらがフランス一の画家クロルプロマジン先

生、私は二番目の画家マニー、そしてこの二人が助手のイミプラミン君とヒドラジン君、そして。

妻 妻です。

娘達 娘です。

マニー そしてだね、あれ？お前、私の娘は何人だ？

妻 やあねえ、何人だなんて、あれ、これ、それ、で三人でしょ。

マニー そう、(指して) あれ、これ、その三人、あつ！ あれ、これ、それ、やや、ひとり多いぞ。

白兔 座敷童子つてのはもう古いですよ。

マニー 君、フランスに座敷童子がいてたまりますか！

黒兔 それにここはお座敷じゃありませんしね。

白兔 お茶の間ギャルソンですか？

妻 だから、名前ぐらい付けりゃ良かったんですよ。どれがどれだか判らないじゃありませんか。

マニー 名前など無意味だ。物は物としてそこにあればいい。人は人としてそこにおればいいのだ。

と、突然イミプラミンの手をたたく。

白兔 イテッ！

マニー ホラ、こうやって(イミプラミンの手を取り) これは手と名前がついたんだ。名前など自然について行くものだ。

妻 でも、あれ、これ、それ、じゃ並びの順序が変われば名前もころころ変わるんですよ。あれかと思えば、これだったり、これがそれかと思っていると、いつの間にかあれがこれになって、これがそれに変わってるんですから。

マニー 今まで、娘三人、東にして扱ってきたんだ。三人一緒に束子とでもつけろ！

周りにいた男子、一斉にたばこを取り出し、娘達一斉にそれぞれ火をつける。

マニー 誰がたばこに火をつけろと言った！

白兎 東子さんに火をつけるんで？

黒兎 魔女狩りですか？

白兎 さすがマニーさん、火でいぶすと、妖怪は正体を現すって言いますしね。娘さん方まとめて、燃やしてみましよう。

天宮 そんな事したら、本物まで、死にやしませんか？

白兎 それくらいの犠牲はしょうがないでしょう？ 真実をあばくためには……ねえ。

黒兎 ええ。

マニー う、う、う。
白兎 じゃあ、川に沈めてみますか？ 体におもしをつけてですね。足の立たない深い川に放り込むんですよ。贗者の、化け物なら、プツカリ浮くそうですから。浮いて来たのをグサツと竹槍でつつくんですよ。

天宮 本物はどうなるんです？

白兎 川の底に沈みますよ勿論。ただの人なんだから。

天宮 じゃあ、やつぱり皆殺しですねえ。

黒兎 しかし、ニセ者が死ぬ前に、本物が死んでいなくなったら、ニセ者は何のニセ者になるんです？ 存在しないもののニセ者は存在しないから、そのニセ者こそ、本物という事になりますなあ。

黒兎 なら、本物の三人もニセ者もみなマニーさんの娘さんという事になりますね。

白兎 うん、この中のひとりだけがたとえ妖怪だとしても、四人ともあなたの娘なんですよ、マニーさん。
マニー なんだ、そうだったのか、あやうく騙されるどころだった。(泡夫に)この悪党め！容赦せんぞ！

泡夫 何するんだよ。

マニー このピストルで、お前をグチャグチャの肉まんじゅうにしてやる。

と、ピストルを構えると、大福餅に変わっている。

マニー やや、ピストルの方がグチャグチャになったぞ。

泡夫 それは正義の大福もちだい！罪なき少年を惨殺する武器にはならないぞ！

マニー 生意気な小僧だ。みんな、かかれい！

泡夫 ああ！

執事 泡夫君、円をつくるんだ。

泡夫 五郎兵衛さん……。

執事 早く。

泡夫、手で円を作って上にかかげる。

と、イミプラミン、ヒドラジン、クロルプロマジン、妻、娘123、突如もだえ苦しむ。
娘4に化けた泡生、皆のマネをして苦しむ振りをする。

マニー これはどうしたことだ。

泡夫 魔物は円を恐がるんだ。

マニー 魔物？

執事 マニーさんは妖怪に取り憑かれていたんですよ。

マニー ちよつと待て、ここは化け物屋敷か？

執事 そうですよ。

マニー お前はどうかんだ？

執事 私は、執事です。丸の好きな執事です。

マニー そうか四角の好きな奴は、みんな妖怪だったのか……。ようし成敗してくれる。おい、十円玉
持つてこい、十円玉。

泡夫 何するんです？

マニー 十円玉を、皆の額に張り付けて、悪魔封じをしてやるのだ。

全員 ヒエー！

泡夫 五円玉の方がいいんじゃないですか？丸が二重になってますよ。

マニー バカだな、真中の穴の中から、ヒューヒュー邪心が逃げ出して、止めがきかんじやないか。

泡夫 なるほどね。

マニー (執事から受け取った十円玉を揚げて) 誰からだ!? 誰からだ! ええ?

全員 ヒエー(と逃げまどう)

マニー 先生、クロールプロマジン先生、ふふふ、これで私がフランス一ですなあ。

クロールプロマジン やめてくれ、誤解だ、マニー君、小学生の君が貯水池に落ちて溺れかけたのを助けてやったのは誰だったっけねえ。

マニー くそう……。じゃあお前だ(妻に)よくも今迄騙し続けてくれたなあ、妖怪め、覚悟しろ。

妻 キヤーツ、マニー、マニー、それだけは堪忍して下さい。私達の妖術がなけりや、あなた、ただの
凶画の得意な隣りのおじさんなんですよ。

マニー なに？

一同 私達は良い魔物です!

マニー 私のこの腕は、実力ではなかったのか?

妻 あなたいつから左利きになりました? 私と一緒にになってからでしょ?

マニー そういえば……。

黒兎 右手は正、左手は負の力の及ぶところ。魔物は左手に棲むんです。

天宮 左手に悪魔が憑いていたんですなあ……。

マニー あああ……。

妻 ピカソだって、レオナルド・ダ・ビンチだってみんな左利きです。

白兔 この世の天才には皆魔物が憑いているんですよ。

妻 それでも私達を追い払う気？

マニー ううん。絵をやめても、つぶしが利かんしなあ、よし（と泡夫を振り上げ）ただの人間の方を、この四角の中に閉じ込めてしまえ。

執事 マニーさん。

マニー お前もだ！（と箱の中に執事を振り入れる）

皆、泡夫を掴んで箱に押し込もうとすると娘4の懐から大福餅が転がる。

娘1 あっ！ダディー、この子、大福持ってる。

マニー なに？

妻 丸を怖がらぬ者は、私の娘ではありません。

娘4、泡生に変わる。

全員 あっ！

泡生 しまった、逆さの術が消えた。

マニー こいつも一緒に閉じ込める。

泡生 畜生、共倒れか。

マニー、天宮と千草をジロリと見る。

千草 私達左利きです。

マニー うん、君等は天才だからここにいてよろしい。あとはおらんか、ただの人はええ？

クロルプロマジン ーあなたがいますよマニーさん。

白兎

マニー 私はいいんだよ君、超天才なんだから。

白兎 いいえ、それじゃ困るんです。

と二人にじりより、ポケットより武器のような物を取り出す。

マニー 冗談はよしたまえ、特に、暗い冗談は。

クロルプロマジン ーハハハハハ。

白兎

妻 ちよつと、どうしたんです。

黒兎 イミプラミンさん、あなた……。

クロルプロマジン

白兎 ー我々は、悪い方の魔物だ。

全員 なんですか？

クロルプロマジン この地上の寓話の中から、良い魔物を抹殺する為、

白兎 天上の悪い魔王の命により参上つかまつった。

クロルプロマジン

白兎 ー悪魔大王の使者なのだ。

黒兎 くそう間の抜けた顔に騙された。

白兎 愚鈍を装ってきたのもこの日の為。

クロルプロマジン ゆくぞ！

天宮 大丈夫、こちらは大勢だ、良い妖術の限りをつくして戦おう。

皆 おう！

妻 あなたは四角いテーブルの下に隠れていなさい。

マニー はい。

良い魔物達、一体となってたち向かう、一天俄にかき曇り、一天四海黒い渦となって雷が響き渡る。

マニー、テーブルの下で、「デイバイデイ イン エブリウエイ アイム ゲティング ベタア
アンド ベタア」と唱え出している。

光線と光線が弾け飛び、一瞬、良い魔物が優勢と見られたその時、二人の悪魔、叫び声と共に、大男に変身する。

皆 あっ！大男だ。

と、とたんに、良い魔物達その場に金縛りとなる。

マニー こ、これは……。

クロルプロマジン ーハッハッハッ。

白兎

クロルプロマジン 皆、石になってしまったのだよ。

白兎 これで我々の役目も済んだ。

クロルプロマジン (マニーに) 君も、ただのおじさんだ。

クロルプロマジン
白兔 ーハツハツハツ。

と二人の大男、天井を突き破って空を飛び去る。
マニー、放心状態で椅子に座り、紅茶を一口する。
紅茶を持った右手に気付き、

マニー あつ、ミ、右利きだ。

千草 (動けないままに) 駄才さん、駄才さん。

マニー ああ？

千草 大福餅、大福餅を拾って、私の額に当てて下さいな。

マニー これか？

千草 ええ、まだ少しは利き目があるかも知れないから。

マニー、千草の額に当てる、千草ゆつくりと動き出す。

マニー おお！

千草、天宮にも同じ事をする。二人共自由になる。

マニー 妻や娘にも……。

千草 いけません、そんな事したら死んでしまいます。

マニー だって……。

千草 私達は天才でも人間ですから、だから利いたんです。

マニー そうか、(と、一ぺんに百歳程老け込む)こうしてみるとみんな懐しい、皆良い奴ばかりだった。
天宮 マニーさん。

マニー いや、私は駄才だ。たった今から名前を変えた。

天宮 あなたは天才ですよ、マニーさん。

マニー いや、右利きの天才はおらん。これから田舎に帰って日記でもつけようと思う。

良い魔物達、白い粉となって消える。

マニー ややや、これは。

千草 初めから、あなたはひとりだったじゃありませんか。

マニー ええ？

千草 独身主義者で、その上弟子もとらずに、たった一人でアトリエに閉じこもる孤独な天才が、あなたよ。

天宮 これは逆さの夢、逆さの左手から右手へと、今、あなたは、夢を夢へと目覚めているのです。

マニー 夢？

千草 じゃなぜあたしがここにいます？

マニー え？

千草 デイバイデイ イン エブリウエイ、アイムゲテイニング ベタア アント ベタア……

マニー き、君はこの絵の……

千草 そうよ、毎夜毎夜あなたの夢に現れる夢枕の少女よ。それで描いたんでしょ？

この間マニー、千草の絵をベッドの上に立てかける。

マニー ああ、不思議な夢、不思議な少女、見た事も聞いた事もない、それでいてなつかしく忘れがた

い。そう、ちょうどそんな風に。まるで何かを暗示するかのようには私の前に現れては消える。君は一体誰なんだ？

千草 それは明日。駄才さん、明日も又夢で会いましょう。

マニー どこへ行くの？

千草 大男を追って北の果てまで参ります。井戸の中に閉じ込められた可哀そうな王女を助けるのです。

マニー 何のために？

千草 判りません。けれど夢が私に強いるのです。逃げ、逃げと、そこまで行けばきつと秘密はあばか

れるでしょう。あなたがこれから目覚めるように、私もまた明るい場所へと出かけるのです。

天宮 千草さん、大男を追いかけるよ、随分時間をくってしまった。(馬の鳴き声聞こゆ) さあ、天駆

ける馬だ、出かけるよ。

千草 ええ、

——と二人馬に乗って窓より飛び立つ。

マニー さようなら、さようなら。

とマニー大福を持ってベッドに座る。

と、弥生の姿にもどった泡生と、泡夫ベッドの下より飛び出す。

泡夫 今度こそ逃がさないぞ。

弥生 やだ泡夫ちゃん何するのよ。

泡夫 あれ？叔母さん。

弥生 泡夫ちゃん、叔母さんが好きならホントにうちに来ない？義姉さんも組合がどうかこうとか出

かけてばかりだし、駄才さんの小説も売れそうにないし、みすみす苦勞を背負い込む事ないわよ。

泡夫　ねえ、うちの人の跡取りになってくれたら、叔母さん安心なんだけどなあ。でも、お姉ちゃんが……。

弥生　つらくても泣かないで、はやく大人になるのよ。

泡夫　何の事？

弥生　今日は早く帰って、お母さんについてあげなさい。

泡夫　叔母さん、お姉ちゃんはどこ？

弥生　ホラ、その後ろに……

と絵を指す、マニーも振り返る。

泡夫　あつ！（弥生笑う）やっぱり君は……。

泡生　泡夫君。この闇の中で、君の影が踏めるのかい？

と泡生、天井より降りてきたロープを掴み飛び去る。

泡夫　こしやくな、今度こそ、つかまえてやる。

と続く、執事、小さくなった秘密の小箱を、泡夫に手渡し、スルリと消える。

マニー　夢だと思えば、すべて自然だ。

と横になる。暗転。

別な高い空間が明るくなると、馬上の千草と天宮の姿が見える。

天宮、美しい金髪の王子に変わっていて欲しい。

千草 天宮さん、雪だわ、雪が降ってる。

天宮 千草さん、少女マンガの声色は止めて下さい。馬が産気づきますよ。

千草 だってこんな事普通じゃないわ、あなたのその服も。

天宮 よして下さい。真面目^{マジ}でやってるんですから。

千草 寒いわ、天宮さん。

天宮 気の持ちようですよ、ちゃんと冬服着てるでしょ、こっちは半袖なんだから。ホラ、もうすぐだ。

千草 あれが氷の国ですよ千草さん。

千草 まあ、きれい。

天宮 あつちですよ、あつち。

千草 えっ？まあ、きれい。

天宮 着いたぞ、どうどうどう。

馬を演っていた黒兎のヒドラジン顔を上げて。

黒兎 痛いじゃないですか。

千草 あら、あなた。

黒兎 正義の黒兎ですよ。

千草 黒は悪玉の色でしょ。

黒兎 逆さの術ですよ千草さん、逆説の黒兎です。

千草 でも氷の国で黒兎じゃ目立つわねえ。

黒兎 だから正義なんですよ、悪は目立たずいつの間にか浸透し、内部から侵していくんです。

千草 白蟻ね。

天宮 さつ、降りますよ千草さん。

下では、大男に成り切っている、クロルプロマジン(霜月)イミプラミン(照夫)が井戸の周りを徘徊している。

天宮 あの井戸ですよ。

千草 あの中にお姫様が閉じ込められているの？

天宮 そうです。

黒兎 どうやって助けるんです？

天宮 まず、大男を倒してそれからだ。

黒兎 あ、誰か来ますよ。

大男の飯炊き女が三人(緋鶴、マリコ、貢)にぎり飯を持って現れる。

三人共氷の国に似つかわしく氷の精の衣装を着込んでいる。

女1 旦那様、食事が出来ましたっす。

女2 召し上がってけらっしゃい。

女3 炊きたてだっす。

白兎 いくら北国だとは言え、東北弁はないだろ？

クロルプロマジン ここは北の果てツンドラだ。山形じゃない。

女1 にぎり飯を食べてる旦那様方の顔を見たら、どうしてもこうなります。

女2 ホラ、雪まで訛って降ってきた。

白兎

ーボダン、ボダン、ボダン。

クロルプロマジン

女3 ボダ雪だなや。

白兎 用が済んだらサッサと帰れ。
クロルプロマジン 家に帰ったら、山程仕事が残ってるだろ？

去ろうとする三人の女。

影に隠れている天宮、千草、黒兎、最後に去ろうとした女1を捕まえて、

天宮 シッ、声をたてるな、危害は加えない。

女1 あのとっ！

天宮 シッ。お前はあいつ等の一味か？

女1 いいえ、私共三人は、実はこの国の王女だったのですが、あいつ等の妖術で、国全体が、ツンドラの下に氷漬けにされてしまい、飯炊き女として働かされているのでございます。

黒兎 ううん、許せない、こんな事が許されていないのか。

天宮 静かにしろ。これこそ、皆が皆声を揃えて悪だ悪だと罵る本物の悪だ。お婆さん、私達に協力してくださいね。

女1 ええ、勿論です。力を合わせて悪を倒しましょう。

天宮 大男の急所を教えてください。いくら万能の悪魔だとして、欠点は何かあるはずですよ。

女1 これと言つてありませんが、強いてあげれば、万能であるという事でしょう。化物は何でも出来るし、何にでも変身することが出来るのです。ですからそれを逆に利用するのです。何でも出来る事がかえって墓穴を掘る事になりますよ。

天宮 うーん。

黒兎 賢い人だなあ、あなたは。

天宮 児童劇の宝を見た思いですな。

千草 長靴を履いた猫は、ネズミになった大男を食べちゃったのよね。

天宮 こつちはどうします？ネズミじゃ食えないし。
黒兎 あれだけ悪い事をしたんだ。一瞬にして殺すのは手ぬるい。
千草 スルメに変身させて、口の中でニチャニチャゆっくり溶かしていくってのは？
女1 それなら、トウモロコシの方が、目玉やら耳やら一粒ずつ食べていくんだから痛いわよ。
黒兎 靴に化けさせて、じわじわ履き潰すってのはどうです？
天宮 それいいね。靴なら歩いているうちに自然に殺せるし、元に戻ろうとしても足の下だ。地面との間に挟まれて、万に一つも助かる見込みはない。そうしよう。
千草 でもどうやって靴に化けさせるかね。

と云い切らぬうちに黒兎が飛び出していた。

黒兎 やい！大男、靴に化けてみる（一同あまりのことにあきれ、大いに落胆する）。

白兎

クロルプロマジン ー何だ貴様は！

黒兎 正義の仕立屋だ。

白兎 仕立屋が何の用だ！

黒兎 靴に化けて見せろと云ってるんだ！

クロルプロマジン どうして？

黒兎 靴に化けたところをだね、履き潰してやるんだよ。

白兎 バカな、私は靴屋だよ、靴になっても靴屋の七つ道具で直し直しやってたら、永久に履き潰される事はないんだからね。

黒兎 ダメでした天宮さん、正義の仕立屋も、靴屋にやかないません。

大男、手に汗握る全国のお子様方を尻目に、恐ろしい叫び声をあげて向かってくる。

千草、天宮、黒兎(金田)、女1(緋鶴)の四人、小人の声色で話しだす。

天宮 あっ、大男がやって来る。

千草 天宮さん、妖術は、何かいい妖術はありませんか？

天宮 うーむ。

女1 大男はどんな事があっても夜の十時になると必ず眠ってしまいます。夜になる迄、上手く引き伸ばす手立てはないでしょうか？

千草 夜の十時？それなら天宮さんの妖術で夜の十時の使者を呼び寄せればどうです？

天宮 よし！ドロドラドン、デロドラドン、ヤアーッ。

黒い馬の黒い騎士登場して十時の時計が鳴り、辺り一面夜となる。

大男その場にぐったりと眠りこける。

天宮 千草さん、この間にお姫様を救い出すんだ！

と四人、井戸の側に近寄ろうとして、透明な何かにぶち当たる。

天宮 これは……。

女1 バリヤーだわ。目に見えぬ氷の壁で覆ってある。用心深い悪魔大王の仕業よ。

天宮 一難去つて又一難か。

黒兎 どうしましょう。

千草 ガスバーナーでもあればいいけど。

天宮 よし、みんなでこの周りを全速力で走るんだ。いつかその熱気で溶けるに違いない。

千草 気の長い話ね。

天宮 百年もかかりませんよ。さあ。

と四人、井戸の周りを走っていると地面より太い蔓草がどんどん伸びてくる。

千草 天宮さん、あれ。

三人 豆の木だ！

蔓草に掴まった泡生が頭を覗かせる。

天宮 するとあれは。

三人 ジャックだ。

泡生 あっ(四人に気付いて頭を引っ込めようとする)。

千草 ジャックさん、ジャックさん、私達を助けて下さいな。

泡生、滑稽な程の千草の真剣さに笑いを噛み殺しながら。

泡生 あの、あなたは……。

千草 ヒロインです。

泡生 麻薬の一種ですか？

千草 あれはヒロインでしょ？

泡生 ああ、カボチャをくり抜いて、かぶって騒ぐ奴ね。

千草 あれはハロウィンです。

泡生 じゃつ(と隠れようとする)。

千草 ちよつと待ってジャックさん、ヒロインを大男の手から守るのがあなたの役目でしょ？

泡生 僕はジャックという名じゃありません。

千草 だつてこれ、豆の木でしょ？

泡生 いいえ、これは、豆は豆でもあずきの木、この花が実を結ぶと、大福餅になるのです。ホラ、ここに一つなっている。食べてみますか？

と実をもごうとする手を下から掴んだ手があった。泡夫である。

泡夫 今度こそ勝負だ(と大福をくわえる)。

四人 あつ、またジャックだ。

泡夫 うまい！(大福を半分程食べた泡夫、目付きが変わる) これで力が倍になった。君と僕とはこれで対等。あとは技あるのみ！

と残り的大福を放り投げるとナイフに変わっている。

泡夫 さあ！行くぞ！

千草 ちよつと待つてよ。力比べは後にしてまず井戸の中の王女を助けるのよ。

泡夫 姉ちゃん、こいつ僕のニセ物だよ。

千草 いいから！

女1 でもどうやってこのバリヤーを破壊しましょう。

黒兎 目に見えない程、厚いですからねえ。

天宮 そうだ、泡夫君、それは、あずきの木だと云ったね。

泡生

ーはい。

泡夫

天宮 そこに実った大福の中のアズキを、氷の壁にぶつけるんだ。
千草 だと、どうなるんです？

天宮 氷アズキになる。

皆 はあ？

天宮 氷アズキになったところを皆で食べる。

皆 なるほど。

天宮 さあ、かかれい！

皆、大福餅をバリヤーにぶつけると天まで伸びていた氷の壁が、氷の欠片となってサクサクと落ちてくる。

天宮 よし、こんなに上手くいくとは思わなかった。みんな、この下痢止めを飲みながら、全部食べてしまうのだぞ。いいか！

全員 はい！

と大男、伸びをして起き上がる。

女1 あつ、朝です。大男が起き出しました。みなさん隠れて！

女1を除く全員、井戸の陰に隠れる。

白兔 なんだ騒々しい、何かあったのか？

女1 はい、旦那様方のお好きな氷アズキを作っていたところですよ。
クロルプロマジン なんだって、氷アズキだと。

女1 はい(とガラスの器に盛られた氷あずきを出す)。

大男達ゴクンと唾をのみ込む。

女1 どうぞお召し上がり下さい。

白兔

クロルプロマジン 「うん、じゃあ。

と目を輝かせ同時に手を出しバツが悪そうに譲り合う。

白兔 や、霜月さん、どうぞ。

クロルプロマジン いや照夫君、君、食べれば？

白兔 まあ、そう遠慮なさらずに……。

クロルプロマジン しかし、僕は年上だし、我慢するには慣れてますから。

白兔 そう云わずに(と云い合っているうちに)。

白兔

クロルプロマジン 「そうですか？(とまた同時に手を出して赤面する)

千草 もうじれったいわねえ。こっちにもうひとつあるわよ。

と千草別の氷あずきを持って差し出す。

白兔

クロルプロマジン 「いや、(こらどうも)等々と口々に)じやいただきます(と二口三口食べる)。

千草 うゝ、見てる方が寒くなる。

天宮　こら大男つてよりも雪男ですな。

白兔　貴様等何者だ！

千草　～あつ！

天宮　～あつ！

クロルプロマジン　さっきの人間共だな。

白兔

クロルプロマジン　～食ってしまうぞ！（と口から氷の白い息を吹きかける）

女1　危ない、逃げて！

天宮、千草ブルブル震えながら凍りかける。

泡夫　おい一時休戦だ。

泡生　よし。

泡夫　大男！こつちにもいるぞ！

大男、大魔神のようにゆっくりと振り返る。

泡夫　やあいやい！

大男、飛び掛かろうとすると別の場所より泡生が頭を出し、

泡生　こつちだこつちだ。

と泡生を掴みかけると、泡夫が又別の場所より頭を出す。

泡夫 こつちだこつちだ！

そのうちに泡夫が二人いる事に気付いた大男、別々に襲いかかりそれぞれ二人を飲み込んでしまふ。

天宮 千草 女1 黒兎

あああ！

大男口から泡夫の千切れた衣服をのぞかせて、舌なめずりをしながら、今度は千草達に襲いかかろうとする、と突然苦しみだし地面を転がる。

千草 どうしたんです？

天宮 大男の腹の中の大福餅がジャック達に術をかけたのだ。

四人 ジャック、ジャック頑張つて！

いい大人がこぞつて声をかける様子は痛々しい程のリアリティー溢るる連帯感を醸し出す。

クロルプロマジン 助けてくれえ。

白兎 痛いよう、痛いよう。

と声聞こゆ。

声 薬いらんかねえ、ええ、薬、くすりい。

クロルプロマジン

白兔

……薬屋さん薬屋さん……（と二人、声の方向へ手を差しのべる）。

ゴンドラ（又は竜）に乗った中国人の薬売り（駄才）が登場する。

四人 あなたは誰ですか？

薬売り 六神丸の薬売りです。

四人 六神丸。

薬売り 歯痛頭痛、腹痛、胸やけ、下痢、リュウマチ何にでも効く、万能薬だよ。ホラ（と薬の粒を見せる）。

大男我先にと薬を奪い合う。

薬売り 少し高いが良く効くよ。ハイ、お水（とコップを手渡す）。

大男、薬の粒をのみ込むと、アラ不思議どんどん小さく縮んでいき、二つの黒い小さな薬の粒に変身する。

四人 あああ！

薬売り フフフフフ（と、その二つの薬の粒を六神丸の薬箱にポトンと落とす）。フフフフフ、薬いらん

かね（と目を光らす）。

四人 ……。

と薬箱の中より泡夫と泡生ポンと飛び出す。

四人 あつ！ジャックさん。

泡夫 もう少しで溶けちゃうとこだった。

薬売り 薬いらんかね。丸い薬は体に効くが四角い薬は薬じゃない（とニヤリと笑う）。

泡生 どの誰かは知りませんが、

泡夫 危ないところを助けていただき、

泡夫 一本当にありがとう。

泡生 マネするなよ。

泡夫 お前こそ！

泡生 泡夫君、そのナイフで僕を刺すかい！

泡夫 よし！僕は人魚のように海のアブクになりやしない。たとえそれが僕の姿をしていても僕がただ一人の僕なんだからな。消えるのはお前だ（泡夫ナイフを持って身構える）。

泡生 おっと、泡夫君そうはさせない（といつの間にか持っていたナイフをキラリと光らせる）。

泡夫 あっ！

泡生 君が持つてる物は、それ以上に僕のものさ。このナイフは切れるぜえ（と泡夫を刺す）。

泡夫 ああ！（しかし何ともない）

泡生 君を刺しても、僕は無事だ、だから君も無事なのさ。

泡夫、泡生をエイツと刺すが泡生何ともない。

泡夫 君を刺しても僕は無事。

泡生 そうさ泡夫君、いつまでも僕についておいで、追いつ、追われつ、どこまでも、この闇の中で、君の影が踏めるのかい？

といつの間にか天井まで伸びていたあずきの木の太木を登って消える。
泡夫それを追いかけて消える。

天宮 さあ、急いで井戸の中の王女を救うんだ！
千草 ええ。

と全員井戸に駆けようとする、高らかな笑い声が響き渡る。
ツンドラ大魔王（歌子）の登場である。

大魔王 ハハハハ、そうはさせないよ。

ツンドラ、ヒューと白い氷の息をあたりにまきちらす。

女1 大魔王に息を吹きかけられると、みんな氷漬けになってしまうわ、用心するのよ。

四人、逃げまどう。ここで正義の子供達、石やら空き缶やらを魔王に投げつけるかも知れない。

大魔王 こしやくな人間共め、生きて帰れると思うなよ。

千草、氷の竜巻きにあやうくのまれるかのように見えた。

薬売り ちいちゃん、こつちこつち（と、不思議な防寒服をかぶせる）。

千草 ありがとう薬屋さん。

薬売り ウハハハハハ。

大魔王 やっぱりあんた、千草とできてたね。

薬売り 何でもカングるんだから、年はとりたくないもんだ。

大魔王 愛さえあれば年の差なんてって云ったのは、あんたじゃないよ。

薬売り あの時俺も若かったからね。

大魔王 今はどうなのよ。

薬売り 年とれば若い方が良くなるんだよ。

大魔王 それで千草に手を出したの？

薬売り 誰がお前の娘になんか！

大魔王 何ですって？

薬売り この子はお前に似て可愛い気がないんだよ。

千草 駄才さん！

大魔王 どうさんだろ？

千草 どうさん、千草の事嫌い？（と目から星の光を放出させる）。

薬売り さあね。

大魔王 オサムさん、父親のくせに、その態度はないでしょ？

薬売り 何かと云うと父親、父親。お前の顔見ると創造意欲がなくなるんだよ。

大魔王 何でも人のせいにして、書けないのは、あんたに才能がないからでしょ？

薬売り なにい？こつちは義理で一緒に棲んでやってるんだぞ！俺はほんとはモテるんだ。大学の時付

き合ってた彼女だつて今もって独身でだな、俺の帰りを田舎でずうっと待ってるんだぞ。

大魔王 それはあんたの小説でしょうよ。今時そんなのは流行らないのよ。悔しかったらSFでも書いてみなさいよ。

菓売り 口の減らん奴だ、出てってやる、出てってやるぞ！

大魔王 出て行けるんなら行きなさいよ、文無しのくせに！

千草 二人共やめてよ、泡夫が起きちゃうわ。

大魔王 千草、あんたも、こんなのに熱あげるの止めなさいよ。

千草 母さん、あたしの日記読んだのね？

大魔王 あんた、文学少女だから、小説家に弱いよねえ、あたしに似て。

千草 母さんたらひどい。人の日記を黙って読むなんて。

大魔王 子の物は親の物、そんなに目くじら立てなくたっていいじゃないの。

千草 もう子供じゃありません。あたしはあたしなんだから。

大魔王 ねえ、天宮さんて誰？あんたの事好きなんだって？えっ？その人、どんな人？えっ？

千草 母さんのバカ！返してよ、あたしの日記返してよ。

と少女の心は泣き叫ぶ。

と、大魔王ヒューと氷の髪を靡かせ襲いかかる。

千草 あああ！

菓売り よおし（と白髪三千丈を靡かせる）。

大魔王 ややや。

菓売り そちらは髪五尺、こちらは白髪三千丈だ！

大魔王 うーむ、日本と中国の歴史の差か。

菓売り 面積の差だ！

白髪に絡まる大魔王を女1、黒兔掴みかかり格闘となる。

天宮 さあ千草さん、この間に、救い出すんです。

と二人、井戸に駆け寄る。千草、中をのぞき込んで

千草 天宮さん、誰もいないわ、ただそこまで氷が迫っているだけ。一点の曇りもなく、ピンと張りつ

めた氷の円が、そこにはあるだけです。

天宮 よおく見てごらん。

千草 いいえ、いくら覗き込んでも、そこにはバカみたいに口を開けてこちらを見ている、私が映つて
るだけ。糸をつむぐ王女の姿はどこにもありません。

天宮 千草さん、金髪の王子のおともは、黒髪の王女。(井戸を指し)そこは幾重にも連なる四畳半の
迷宮、その中に座っているのは他にもない、あなたです。

千草 あたし？

天宮 セーラー服の王女です。

千草 あれはあたし……冷たい氷の井戸の中から、目を見開いて明るい場所を指差しているのは、あれ
はあたしですね。

天宮 ええ、マンモス象さながら永久保存の温度の中でいつも彼方の方角を見つめながら、ああして座
っているのです。

千草 ……

天宮 千草さん。

千草 あなたは誰？少女のあたしが毎夜毎夜なぐり書きした日記の中の天宮さんは、そんな目をしてあ
たしを見るはずがない。それをあたしは知っていました。だってあたしは、少女の中の少女、妬
み辛みで身をひしやげ、理性ばかりが頭をもたげる、コンプレックスを昇華しそこねた、墮落の
少女ですもの、あなたは一体誰なんです？

地面が大揺れに揺れ、空間が歪み、世界がきしむ音が聞こえる。

天宮 千草さん、これで四度目だ、もう逆さの術は消えてしまおうよ。

悪魔大王敗北の声を上げ、泣き叫ぶ。

舞台ドタンと暗くなり、別な暗闇とすり変わる。

泣き崩れた魔王、喪服の歌子に変わっている。

正面に黒いリボンのかかった千草の似顔絵。

まわりはやはり喪服を着て集まる親戚一同。

緋鶴 姉さん、気持ちをしつかり持って。

歌子 千草、千草あ。

照夫 姉さん、御焼香が始まりますよ。

歌子 照ちゃん……。

照夫 あきらめるんです……あつ霜月さん。

霜月 どうも。

歌子 あんたあ……あんたなんかには押んで貰わなくなっているのよ。帰ってよ、帰りなさいよ。

照夫 姉さん、誰を恨んだって始まりやしないよ、ちいちゃんは戻ってこないんだから。

霜月 ……。

緋鶴 そうよ姉さん、霜月さんは、実の父親じゃありませんか……。

歌子 (泣き崩れる)

家族達シルエットになると、手前にいた泡夫と天宮浮き上がる。

泡夫 天宮さん、姉さんは、姉さんはどこにいるんです？

天宮 泡夫君、姉さんは、ちよいと立ち止まっただけなんだ。

泡夫 けれど姉さんは……。

天宮 姉さんはちよいと石になったただけなんだよ。

泡夫 石に？

天宮 美しいものを、眠れぬ日々の終末に、美しいものを見てしまつてね、ちよいと石になったんだ。

泡夫 どの石になったんです？

天宮 どれか美しい石にね。

泡夫 僕には見えない物ですか？

天宮 見えるように見えない抽象の石にね。だから生命を吹き込むのは君の役目さ。

泡夫 生命を？どうやって？どうやってやるんです？

天宮 判らないのさ。

泡夫 妖術を使つても駄目なんですか？

天宮 ……どんなに激しい生き方をしても、どんなに優しく過ごしても、死ねばただあつけなく、白い煙を燻らせた、人ではない物になる。そこには誰もいない、それを見る人達だけだ。そこに生命を吹き込むのは残された人達だ。

泡夫 嫌だ、嫌だよ天宮さん、そんな事で、納得できる程、僕の少年の魂は落ちぶれちゃいけませんよ。目には見えない物の中に姉さんを閉じ込めるなんて、そんな大人のやり方は嫌いです。

天宮 じゃあ、君はどうしようと言うんだい？まだそんな過去の中で、いつか見た夢の続きをまさぐつて行くのかい？

泡夫 ええ、天宮さん。いつか結婚して、子供を二人ばかりこさえて、誰からも疎まれずに、しかも目立たず、新聞に暇潰しの投書ばかりしている小ぎれいな奥さんと、中古のスカイライン、玄関脇

の分別ゴミから覗くアルミのロング缶。あきれ程穏やかで、涙ぐむ程優しい平和。右へでも左へでも社会の後からおずおずと歩いて、酔うと必ず思いついた話ばかりを語るような、そんな大人には決してなりません。僕はあの時誓ったのですから。日々の安眠と引き替えに限りなき夢の中で、いつまでも生き続ける事を！

天宮
泡夫君！

泡夫
天宮さん、僕はもう行きます。

天宮
君が行ってしまつたら、僕は、僕はどうすればいい？

泡夫
時々そんな風に、優しい幽霊になって、後悔の扉をノックすればいい（と去りかける）。

天宮
……お姉ちゃんは、お姉ちゃんは淋しくないだろうか。

泡夫
僕がいるもの、お姉ちゃんよりもっと淋しがり屋の僕がこうしてお姉ちゃんに生命を吹き込むよ。

だから、お姉ちゃんは、やつと眠れるようになったって、笑いながら僕をぶつよ。体育祭でも走るよ、約束してた天覧試合も見に行くよ。

天宮
（覗いて）泡夫君、一つだけお願いがある。お姉ちゃんに会ったら、幽霊になって会いに来てく

れないかって頼んでみてくれないか？

泡夫
ダメさ、だってお姉ちゃんは死んじゃいないもの。代りにこれあげるよ。

と小箱を渡す。

泡夫
朝には朝の光が、夜には夜の闇が……秘密の小箱さ。

天宮
ああ、これは……。

泡夫
もう、なくしちゃつたらう？泡夫君。

赤ん坊を背負った天宮の妻登場。

妻 (天宮に) 泡夫さん、泡夫さん、帰って来たんなら声ぐらいかけてよ、もう、知らなかったわよ雨が降ってるなんて。

天宮 ……。

妻 ちようどハムエッグ作つてたのよ、油の弾ける音つて、雨の音に似ているのね、初めて気付いたわ。ねえ、泡夫さんたら、あなたのシャツだってビショヌレよ、ただでさえ乾きにくいのに。

天宮 君は……。

妻 もうすぐ良夫も帰ってくるし、先に食べちゃう？それともお風呂？あら、何それ？

天宮 (小箱をさし上げて) 秘密さ。

妻 やあね、子供みたいに。

天宮 君は誰だ？

妻 そう尋ねた途端に、まるで誰だか皆目さっぱり判らなくなるよなそんな者、あなたの妻ですわ。

天宮 そう云えば、今迄一度も尋ねた事がなかったっけ。

妻 ええ、だからもう、私は……変身は止めていたのです。

天宮 それじゃ、又姿を変えるのかい？

妻 ええ、誰だ誰だと問われる度に、僕はいつまでも姿を変えるのさ。

天宮 君は……。

妻 (泡生) 泡夫君、この闇の中で、君の影が踏めるのかい？

泡生 笑いながら飛び去る。

小箱を抱きながら、ゆっくりと天宮立ち上がる。

後方にいた泡夫喋り出し、天宮それにだぶつてゆっくりと喋り始める、泡夫は消える。

泡夫

……お姉ちゃん……学校でいじめられるんだ。僕、何もしてないのに、皆いじめるよ、凶工の時に僕が作った粘土細工も潰されたし、ソクラテスの似顔絵もチリチリに破られたよ。お姉ちゃん。何かが、何かが僕の周りで決まってるよ。僕はいつもそれを知らないから、だから仲間はずれなんだ。だからだよ。だっていじめられるんだもの。僕嫌われるような事一つもしていないものね。いつもじいっとしてるよ、教室の片隅でいつも黙って、空を見てる。誰かと目が合ったりしたら殴られるもの、

泡夫
天宮

一だから息を殺してじっとしてるよ。でも休み時間になると、いつのまにか、皆に囲まれてこづかれる。僕が秘かにバカだなあなんて思ってる鼻垂れのやつちゃんにもこづかれるよ。僕がどうして？って聞く前に殴られるから、僕鼻血が止まらないよ、喉に青筋が出るんだって僕。声にならないんだよ。何か云おうとすると、喉がつかまって涙が出ちゃうんだ、

天宮

恥ずかしいけど涙で目の前が溢れちゃって……。廊下に立ってるんだ。教材を取りに来れなかったからって先生に立たされるんだ。でも、ひどく殴られるから、いつも取りに行けないんだよ、僕。決まってるよ。お姉ちゃん、お姉ちゃんも殴るだろ？僕のこと、どうして僕殴られるのかな？でもお姉ちゃんはハハハ、お姉ちゃんも判ってるんだよね、お姉ちゃんは、僕が、殴られるから殴るんだよね。だって、お姉ちゃんも空を見てるもの。いつも彼方の方角を僕に指差すように見ているもの。だからしようがなく殴るんだよね。お姉ちゃんは違うよね。（方々から泡夫を呼ぶ女の声がする）忘れない、僕忘れないよ。僕ここにいるんだもの。殴られて、こづかれて、つねられて、僕、忘れないよ、お姉ちゃん！

千草、スツと現れる。

千草

バカだね泡夫は、お姉ちゃんはちゃんと知ってたよ。この世でたった一人死んでから神様になれ

る人間がいるとしたら、お姉ちゃんだよ。だってお姉ちゃん、泡夫のこと何でも知ってるもの。お姉ちゃん来てくれたの？じゃああの少年の泡夫は一人ぼっちで向うにいるかしら。

千草 バカだね、少年の泡夫は少女のあたしとあそこにいるけど、ここにいるのは中年のあたしだよ。あんたと一緒に年取って、何年も社会を見てきたお姉ちゃんだよ。あんたがあの日、生命を吹き込む術を見つけてから、こうして一緒だったのを、忘れちゃったんだね、あんた。あんたが日々十二時間の安眠と引き替えに、私にくれた美しいもの……なあんだ？

天宮 知らない、知らないよ。それは僕にも見えるものですか？

千草 いいえ、絵に描こうとも、歌で歌おうとも別な形に姿を変える。知ってて知らない、見えても見えない、それは、そんな風なものなのです。

天宮 僕、それを見たいなあ。

千草 じゃあ、今度はお姉ちゃんが妖術を使いましょう。指を一本こんな風を立てて。デレデロデンドロドラドン、ドロレラデロランレン！

ベッドで唸るマニー。

別な高い空間にマニーのアトリエ浮かび上がる。

黒兎 ーメランコリーさん、メランコリーさん。

白兎 唸られていますよ。

黒兎 メランコリーさん。

マニー バカな、私はマニーだ。陽気なマニーだよ。

白兎 やっ、治ったんですな。それは良かった。

マニー いや、又、夢を見てね。今度こそ絶対に描ける自信が沸いておるんだよ。あの通りに、あの夢の通りに描けば完成だ。

白兔 完璧な丸ですね。

マニー 三重丸だ。題して「夢見る少女」とね。

黒兔 へへえ。

マニー 皆呼んで来い。

妻 もう揃ってましてよ、あなた。

娘三人 素晴らしいわダディー。

マニー ハッハッハッ。

黒兔 又、落ち込まないうちに完成させて下さいよ。

白兔 いや、良かった良かった。

別な空間に、さつきから靴をたたき続ける老人（五郎兵衛）がいた。

老人 ……お姉ちゃん……。

泡生を追う泡夫の姿と馬上の千草と天宮の姿が絵に描いたようにクッキリと浮かび上がる。永遠の夢見に相応しい音楽が聴こえ、千草の唱える「デイバイデイ……」の聲がそれに重なる。今、安眠は安眠としての価値を失い。見果てぬ夢のそのまた果ての闇の向こうに、ピシリと痛み
みの光線が走った。

劇団300第七回公演

日時 12月4日(金)～13日(日)

PM7:00 土・日 PM2:00、7:00 (13日は2:00のみ)

場所 カフェテアトロ新宿もりえーる

料金 前売 1200円 当日 1500円

前売 新宿MY-GITY(1F)チケットビューロー

渋谷区東(有明)プレイカイト

劇団300第七回公演「夜の影―優しい怪談」(初演)

日時：1981年十二月四日～十三日

会場：カフェテアトロ新宿もりえーる

作・演出 渡辺えり子

配役

天宮伸彦／新谷一洋 霜月千草／もたいまさこ 霜月龍之介／水野公晴 霜月歌子／渡辺えり子

霜月泡夫／佐々木充 駄才オサム／藤堂貴也 神前照夫／菅野久夫 神前弥生／光永吉江

神前マリ子／村田ユチコ 金田明／江上真吾 金田緋鶴／聖あやみ 金田貢／白石楨

大佛五郎兵衛／東銀之介

やさしい怪談

スタッフ 舞台監督／武川喜俊 美術／松野潤 照明／森田三郎・稲垣聖一 作曲／黒崎達一郎
音響／原島正治・堀江由美子 演奏／有泉実 振付／聖あやみ 宣伝写真／半沢茂久
宣伝美術／日出嶋昭男・浅野真紀子 スタイルリスト／久我山もえ 制作／プリティ・ペア



劇団300第十七回公演「夜の影―優しい怪談―」(再演)

日時：1986年十一月十五日(土)〜二十日(木) 会場：三軒茶屋 小劇場

作・演出 渡辺えり子 銀

キャスト 光永新東中渡 川花立武村稲遠藤白石

柴田みどり 狩野さゆり 山木チヒロ 竹内久美

配役

天宮伸彦／新谷一洋 霜月千草／光永吉江 霜月龍之介／武發史郎 霜月歌子／渡辺えり子

霜月泡夫／立花弘行 駄才オサム／中進 神前照夫／遠藤靖 神前弥生／豊川悦司

神前マリ子／狩野さゆり 金田明／白石禎 金田緋鶴／柴田みどり・竹内久美 (ダブルキャスト)

金田貢／村上靖尚 大柳五郎兵衛／東銀之介

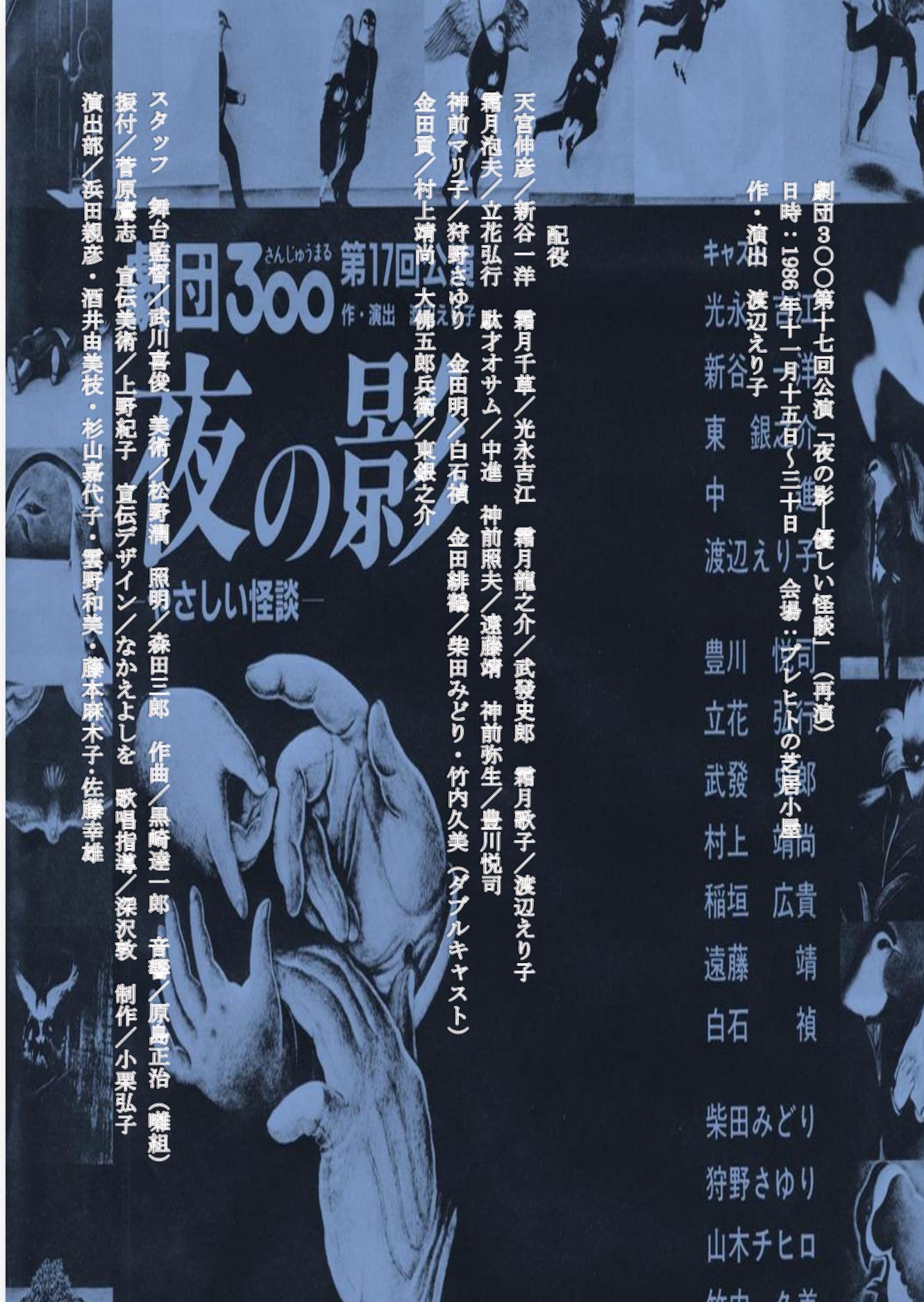
劇団300 第17回公演 夜の影

怪談―優しい

スタッフ 舞台監督／武川喜俊 美術／松野潤 照明／森田三郎 作曲／黒崎達一郎 音響／原島正治 (囃組)

振付／菅原慶志 宣伝美術／上野紀子 宣伝デザイン／なかえよしを 歌唱指導／深沢敦 制作／小栗弘子

演出部／浜田親彦・酒井由美枝・杉山嘉代子・雲野和美・藤本麻木子・佐藤幸雄



● 著作

渡辺 えり子

● 作成

渡辺流演劇塾一期生・二期生

● 発行元

おふいす300

● 発行日

2015年3月

● 印刷

ちよ古つ都製本工房

◇ この戯曲を上演する際は、おふいす300まで御一報願います。

◇ おふいす300 メールアドレス：mail@office300.co.jp

夜の影—優しい怪談

渡辺えり子

夜の影—優しい怪談

渡辺えり子

